国際協力フィールドワーク実践　カンボジア

2023 年 2 月 16 日～2 月 24 日

甲斐田万智子ゼミ　１０期生

人権・ビジネス・国際協力研究

目次

甲斐田万智子ゼミナールとゼミ生の紹介 ---------- 3
フィールドワークの日程表 ---------- 4
はじめに ---------- 5

第１部　訪問先別報告（訪問順）

トゥルオンプラサー小学校 ---------- 7
CCWC ---------- 11
ポーマオン小学校 ---------- 14
元ピアエデュケーター（ニタ）---------- 19
ピアエデュケーターとの対談&家庭訪問①（ソンハー）---------- 21
シーライツコミュニティセンター ----------25
家庭訪問②(ヘン・ソフォン) ----------28
NGO フレンズ・インターナショナル ---------- 32
NGO セントラル（レンガ工場）---------- 36
CAM ASEAN ---------- 41
パニャサストラ大学 ---------- 43
シャンティ国際ボランティア会(SVA) ----------46
中川香須美さんレクチャー ---------- 49
中村健司さんワークショップ ---------- 54

第２部　フィールドワーク考察

新井達也／大熊愛 ---------- 57/60
大島万奈／多田有香 ---------- 63/66
千明隼也／橋本隼登 ---------- 70/73
インペリアル／森下晶代 ---------- 75/78
山崎姫乃 ---------- 81

お世話になった方々への謝辞 ---------- 85

はじめに

カンボジアで 7 日間、現地の学校や NGO 団体、また、トゥールスレン博物館やアンコールワットに訪問し、カンボジアの暮らしや歴史に触れることが出来ました。フィールドワークに行く前はみんながカンボジア＝「貧困」のイメージを持っていました。目を背けたくなるような現実を知り、様々な課題があるということも学びました。しかし、訪問先では、現地の人が明るく出迎えてくれたり、笑顔で挨拶してくれたり、とてもフレンドリーに接してくれました。人の温かさや子どもたちの元気さがカンボジアをさらに魅力的な国というイメージに変えてくれました。これらの経験は私たちの生涯の財産になるでしょう。

本報告は、カンボジアを訪れて学んだことやそれぞれの調査研究の情報収集したものをまとめたものです。

参加者一覧（名前・研究テーマ）

甲斐田万智子ゼミは国際協力や人権を中心に研究しています。2023 年度はそれぞれの興味のあるテーマを見つけ、それぞれについて文献を読み研究し、授業にてプレゼン形式で発表してきました。ゼミ生の卒論テーマ、興味のあるテーマは以下の通りです。

- 新井達也「ヤングケアラー」
- 大熊愛「児童労働」
- 大島万奈「LGBTQ」
- 多田有香「性的搾取」
- 千明隼也「学校の校則」

・ 橋本隼登「ジェンダー」

・ インペリアル「シングルマザーの現状」

・ 森下晶代「日本に住む外国ルーツの子どもに対する教育」

・ 山崎姫乃「子どもの参画」

・ 引率教員：甲斐田万智子

カンボジアフィールドワーク　日程表（簡略版）

2 月 17 日　トゥールオンプラサー小学校

女性と子どものためのコミューン委員会（CCWC）

2 月 18 日　ポーマオン学校

ピアエデュケーター・家庭訪問

2 月 19 日　シーライツコミュニティセンター（子どもにやさしいスペース　CFS）

ピアエデュケーター・家庭訪問

2 月 20 日　フレンズ・インターナショナル Friends International

CENTRAL (Center for Alliance of Labor and Human Rights)とレンガ工場

2 月 21 日　パニャサストラ大学

シャンティボランティア会（SVA）

トゥールスレン博物館

中川かすみさんレクチャー

2 月 22 日　中村健司さんワークショップ

2 月 23 日　アンコールワット

タ・プローム

アンコール・トム

第１部

訪問先別報告

スバイリエン州チャントリア郡トゥルオンプラサー小学校　報告

20FL626 多田有香

訪問先　スバイリエン州チャントリア郡トゥルオンプラサー小学校
訪問日　2 月 17 日（金）

1.　活動内容

学年でいうと 1 年生が 11 人、2 年生が 14 人、3 年生が 18 人、4 年生が 7 人、5 年生が 11 人、6 年生が 8 人。年齢でいうと 6 歳が 11 人、7 歳が 5 人、8 歳が 11 人、9 歳が 13 人、10 歳が 5 人、11 歳が 11 人、12 歳が 8 人、13 歳が 4 人、14 歳が 1 人いる。まず、到着してすぐに授業を受けていた子どもたちの前で、自己紹介をし、質問をして答えてもらった。その後、子どもたちと遊んだ。大縄跳びやボールを日本から持っていったのでその遊具で一緒に遊んだ。教室で先生たちと食事をした後、お話を聞いたり、質問をして答えていただいたりした。

2.　質問内容

〈生徒に対して〉
①学校では何を学んでいるか。
算数、社会、国語、英語
②学校では何が楽しいか
サッカーやバレーをして遊ぶこと
③家でお手伝いはしているか、何をしているか
皿洗い、掃除、牛の世話、ご飯を炊く、兄弟の世話
④お金をもらってお手伝いをするか
もらわない
⑤兄、姉は縫製工場で働いているか
はい（21 人）。カジノで働いている兄弟がいる（9 人）。農場ではいなかった。年齢は 2、30 歳、18 歳や 19 歳で働いている兄弟もいる。
⑥将来の夢は何か

ほとんどが先生、医者（9 人)、軍隊（8 人)、警察（8 人)、会社（9 人)、工場（4 人)、エンジニア（4 人）

① 学校のルールはあるか

門では自転車を降りて歩く、ゴミはゴミ箱に捨てる、授業中にお菓子を食べたり遊んだりしてはいけない

〈先生に対して〉

① コロナ禍はどうだった？

一ヶ月休みだった

② 教える上で気をつけていることは？

遊ぶだけではなく勉強をしてもらいたい

③ 何人コロナにかかったか

4 人

④ 検査はできるのか

できる。マスクも支援してもらった

⑤ 通学時間はどれくらいか

1.5km、歩いて 2 時間ほど

⑥なぜ先生になったのか

家計を支えるため、先生になりたかったから

⑥ 学校を卒業した先生はどれくらいいるのか

3 人は卒業した。他の 2 人は契約している

⑦ この学校に女性の先生がいるが他の学校はどうなのか

他の学校は少ない

3. まとめ

学校が楽しいと言っている生徒が多く、皆将来の夢があって嬉しそうに答えてくれた。学校では遊ぶことが好きと言っていて、やはり学ぶことと同様に遊ぶ場所があるということはとても重要であると思った。友達と一緒に安心して遊べることが子どもの権利を守ることにつながる。また、縫製工場で働いている兄弟が多いことから、働く場が増えていることを知った。働く場が増えることは良いことであると思うが、子どもたちが働くというのは子どもの権利を侵害している。多くの子どもたちがもっと学び、もっと遊んでほしいと考えた。また、子どもたちが笑顔で出迎えてくれた時には親しみやすく、とても可愛いと感じた。元気で、持っていった遊具でもたくさん遊んでくれて嬉しかった。大縄を回したり、ボールで遊んだり、鬼ごっこをしたりして、たくさん遊んで私たちも楽しい時間を過

ごすことができた。先生方からお話も聞くことができたが、みな、学校と家が遠い、学べる場所を増やしたい、施設を増やしたい、とおっしゃられていて学校が少ないことが身に染みた。

女性と子どものためのコミューン委員会 CCWC

20FL626 多田有香

訪問先　タナオのコミューン評議会役場
訪問日　2 月 17 日（金）

1.　活動内容

タナオコミューン評議会の議長、村長、CCWC の方々と質疑応答を行い、日本とカンボジアの情報共有をした。カンボジアでの児童労働や学校に行っている子どもたち、性的搾取などの現状についてお話をお聞きした。

2.　CCWC について
Commune Committee for Women and Children の略。女性と子どものためのコミューン委員会。約 20 年活動している。

3.　質問内容

①中学校で働く子どもがいたりものすごい児童労働があったが今はどうか。
以前はベトナムに行って物乞いをする子どもが多かった。しかし今はない。赤ちゃんを抱っこして物乞いをする人いたが今は少ない。
②中学校を辞めて働く人はいるか。
いる。1 年に 2～3 人いる。
中学校を卒業する割合は 70%
残りの 30%は縫製工場で働いている。この子どもたちは進級試験が不合格になった人である。
高校に行くのは 60%
その中で女性は 10～20%
③どのくらいの頻度で集会を開いているのか。
1 ヶ月に 5 回話し合っている。警察官（2 人)、村長（3 人)、コミューンの人々（3 人)、15 人～20 人の子どもがいる。
④　LGBTQ の人々に対して差別はあるか。
たくさんいるが差別させない。自由になってきている。
⑤　家庭内暴力は減っているか。
まだいるが少なくなった。女の人が警察に言わない。
⑥　インターネットでの性的搾取はあるか。
スマホを使えるところならあり得る。メッセンジャーで詐欺の DM が来ることもある。

⑦　一年前の LGBTQ のワークショップに参加したか。

はい、差別しないようにと思った。

⑧　塾に言っている子どもは塾に行きたいと子どもから言ったのか、親に言われたのか。

どちらもあるがティーさんのお子さんはできていない科目を自分で学びたいと言って自分から塾に行きたいと言った。

4. 現状

・工場が増えているので遠くに行く必要がない。
・コロナ禍でたくさん仕事がなくなっている。最近では回復してきていて、注文も戻ってきている
コロナになったら検査して 2 週間隔離され、治ったら工場に戻ることができる。
・女性も権利について理解している人は増えた。
・コロナ禍で人を集めることはできなかったが、この権利について伝えていきたい。
・コミューンはおとなが子どもに対する暴力はダメという認識が高く、叩くことはなくなったが、言葉の暴力はまだある。
・週末に親の手伝いではなく、塾に行く子どもが増えた。
・5 年前くらいから覚醒剤が問題となっている。身の回りにそのような人がいて治安の悪さを懸念している。
・通っている 4 割の子どもたちが、親を助けることを理由に中学校を途中で辞めてしまう。
・人身売買や性的搾取は飲み屋、カラオケなどでまだある。子どもの買春もカジノや都会ではい多い。
・ピアエデュケーターが望まない妊娠をしたことがある。
・One window, one service　ここにくればなんでも相談できるし解決できる。
〈ヤングケアラーについて〉
・親が病気になったら子どもが面倒を見るのが普通である。仕事をせざるを得ない。
・水牛を売って親の病院代に使う。
・貧困カードというものがあってそれを見せると病院が安くなる。
・家計を支えるために働いている分、長期間も学校に通わないと学校の在籍が消えてしまう。

5. まとめ

家族の絆が本当に強いと感じた。親が病気になれば自分の学業を辞めてまで仕事をして生計を支えなければならない。また兄弟の面倒をみることも当たり前である。しかしこの考え方は見直すべきであると考える。絆が強いことは良いことであるが、子どもがのびのびと暮らすことができない。勉強をして知識を持つことによってできる仕事の幅が広がる。自分がやりたいことを行える上、またそれが稼ぎにもつながる。そのため、いつでも勉強できる環境が必要である。しかし、考え方をすぐに変えることが難しい。そのため、学校にいつでも戻って来ることが出来るような仕組みを作ることが重要

であると考える。親が働けなくなって子どもが働かなくてはならない状況の時に学校から離れてはしまうが、いつでも戻ってくることが出来る体制を整えたり、学校に行けなくても勉強できるように学べる児童館のようなものをおいたりとすることが必要だと考えた。また、差別しないと言っていたが笑っている場面をあり、差別していると気づいていない人がいるのではないかと思った。性的搾取やジェンダー、LGBTQ の差別も少なくなったと言っていた。しかし、データがなく、口頭だけなのでどこまでが正しいかはわからない。また、警察が果たして責務を全うしているのか少し気になった。啓発活動をより行なっていってほしいと思った。

コミューン評議会での写真

最後の挨拶をする様子

コンポンロー郡ポーマオン小学校

20FL626 多田有香

訪問先　ポーマオン小学校
訪問日　2 月 18 日（土）

1.　活動内容

まず、学校の校長先生やソーリター先生（小学校 2 年生担当、算数、国語、社会など）、ゲルソップサーン先生（小学校 5 年生担当）とティーさんと情報交換や意見交換を行った。その後、授業の見学をさせていただき、子どもたちと外で手綱引きやハンカチ落としや鬼ごっこのような遊びで遊んだ。

2.　質問内容

①子どもの権利をどのように教えているか。
教育省からもらった社会の教科書に子どもの権利について載っているのでそれを使って教えている。子どもの権利の 4 つの大きな権利（生きる権利、守られる権利、遊ぶ権利、参加する権利）に加え、児童労働と人身売買についても教えている。クラスのリーダーが 1 人いて学校の目標を決めている。今年はトイレ修理するなどの目標を決めた。ちゃんと綺麗に掃除できているか学生同士で確認、認識しあって協力し合う。ゴミを拾って環境にも気を配るようにしている。宿題できない子も学生同士で助け合っている。
②他の先生方はどのように教えているか。
1、2 年はまだ教えていない。4 年生から教えている。
（5 年生に教えている先生）
自分の権利を理解しているか 4 つの権利の内容を教える。その後、自分も権利を守るためにどのように使っていくのか教えている。例えば、生きる権利では学校で何かあったら自分の親に報告する。そうしたら学校に来てもらって相談する。以前、課題を出したが生徒が提出しなかったため、定規で軽く叩いた先生がいた。弟が親に兄が叩かれたことを報告。その子の親が学校に来て、なぜ叩いたのかと聞いた。叩いた先生が愛情を持って叩いたといったが、よくないことであり今後はやめるようにその親は言った。校長先生もそのようなことがないように指導した。
③日本に住む外国ルーツの子どもは第 2 言語すら話せないことが多い。自分の言語がわからないと日本語もわからない。それで困っている子が日本にはたくさんいる。カンボジアに住む外国ルーツの子どもたちにクメール語をどのように教えているか。
外国ルーツの子どもがいない。ベトナム人のお父さん、カンボジア人のお母さんの方はいる。カンボジアに住んでいるならクメール語をまず話せるようにすることが大切。
④LGBTQ を前向きに考えているのか、あまり良くないと考えているか。
最近はあまり差別ないが、年配の方には理解されていない。

⑤LGBTQ の教育は行われているか。
全く取り組んでいない。
⑥先生方に LGBTQ の友達いるか。
1 人いた。女の子と遊んでいる男の子。中学校 2 年生までずっと友達だったが引っ越していった。
学校の近くにも女性のカップルが 2 組いる。女性同士のカップルの反対のお母さんが実家に遊びにいくといって連れ戻した。
⑦LGBTQ であることをカンボジアでは隠さないといけないか。
隠す必要ない、隠していない。
⑧校長先生は女性カップルの方のことどう思うか。
何も思わない
⑨この学校の子どもたちは LGBTQ の子どもたちはいるか。
1 人いる。男の子が女性っぽい話し方をする。見た目は男の子で、遊ぶときだけ女の子っぽくなり、女の子とだけ遊んでいる
⑩差別ないといっていたが、からかわれることはあるか。
おかまと呼ばれている。面白おかしくしている。
（ここで先生方も笑っていた。）
⑪性的虐待について聞きたいが、子どもたちに相談されたことあるか。
ない。理由は今縫製工場がたくさんできている。仕事行って必ず帰ってくるから今はない。
⑫子どもたちから誰かにいたずらされたなどで相談を受けることはあるか。
相談されたことない。昔はあったが最近はない。
→どうして今はない？昔は治安が悪かった。NGO の活動が多くなったことも理由の一つ。村の人々に知識を伝える。親がスマホを持っているからニュースなどを見てどういう人が悪い人か気をつけるようになっている。
⑬日本の中学校は必要のない規則（スカートの長さとか）があるが、カンボジアではあるか。
制服のシャツは白、ズボンは青となっており、黒髪の毛は短く切ることが定められている。アクセサリーはダメ。男はピアスダメ。やっている子いるけど、なくなったら自分の責任としている。髪の毛を染めることもダメ。休みの時は自由だが戻ったら黒にしてもらう。
⑭校則について子どもから意見を聞いたり、子どもから意見を言われることあるか。
週に 2 回、月と金の 15 分の朝礼で髪の毛と制服をチェックするが、子どもから意見をいうことはない。
→クラスで 1 人代表とあるからそのような場で子どもたちの意見を聞くようにしてほしい。

3. まとめ

LGBTQ の話の時に笑っていることが見受けられた。また相談されないし今は性的搾取がないといっていたことが心に引っかかった。どんなことでも相談できる環境が必要であると感じた。子どもに寄り添ってなんでも話せるような場所が学校になれば良いと考えた。LGBTQ であることからからかわ

れ、嫌な思いをしているかもしれない。また、学校の勉強や家庭での問題などなんでも話せるようなカウンセラーの先生を置いた方が良いのではないかと考えた。また、子どもの権利について小さい頃から学ぶことが重要であるため、小学校低学年でも授業を行うことが必要である。

また、大人数の子どもたちと遊んだ。円になってハンカチ落としをしたが、はじめは日本と少し違うルールというのとカンボジアの生徒もわかっていなかったが、ガイドのポゥキーさんと通訳のラタナさんがルール説明をしてくれたのでみんな理解し楽しむことができた。手だけで綱引きを行ったり、手を繋いで何人か一緒に行動しながら鬼ごっこをやったり、子どもたちが活発で元気で楽しそうにしている姿を見てこちらもより楽しくなった。遊べる場があるということがとても重要だと考えた。私も小さい頃にたくさん遊んだことを思い出した。その遊び場や遊んでくれる人は当たり前ではなく、与えられた環境であったことにありがたいと改めて思うことができた。子どもたちが安心して遊べる場が増えることが大切である。

ポーマオン小学校の子どもたちとの写真

授業の様子

先生たちとの情報交換をしている様子

質問をしている様子

子どもの権利についてのポスターを見せていただいている様子

子どもたちと遊んでいる様子

ニタの家庭への訪問と面談

20FL626 多田有香

訪問先　ニタの家
訪問日　2 月 18 日（土）

1.　活動内容

ピアエデュケーターだったニタの家庭を訪問した。そこでカンボジアの学校の現状や問題について質問し、答えていただいた。おばあちゃん、お母さんもいらして家族目線での学校や娘の思いについてもお聞きした。

2.　ニタの概要

・元ピアエデュケーター
・高校 2 年生
・高校の近くの 1 人部屋で住んでいる。
・ピアエデュケーターの友達に高校が一緒の人がいる。

3.　質問内容

①どんな勉強が好きか
国語。詩が好き。
②奨学金はどのように使われているか
部屋代、交通費、週 2 回の塾のお金、食事代
塾に行かないと授業についていけない
③将来の夢、やりたいことは
学校の先生になりたい。国語の先生。
小学校中学校どちらでもいいが、中学校の先生になりたい。
④ここの中学校で国語を勉強していた時に何かここが面白いと言うことはあったか。
詩が好き。自分で製作した詩もある。
⑤中学校は楽しかったか
仲間がいっぱい居たから楽しかった。
⑥休日は何をしているのか
友達と遊んで話す。
⑦高校生活で困っていることはあるか。

家が離れているから病気になったら大変。この前夜中熱があって点滴と薬を飲んだ

⑧お母さんは高校に行くことに対してどう思っているか。

心配している。離れているから不安。勉強することに関しては、嬉しく思っている。頑張ってほしい。大学まで行ってほしい。お母さんは学校に行っていない。

⑨どんな詩が好きか。

自然の詩とか昔話が好き。

⑩高校卒業後は進路で決めていることあるか。(大学行きたいなど)

大学まで行きたいけど行けるかわからない。

4. まとめ

大人数対ニタ１人だったので緊張気味だった。しかし、忙しい中、話し合いの時間を設けていただいて、質問にも丁寧に答えていただいてとても有意義な時間だった。ニタの勉強したい姿を見て、より勉学に励んでいきたいと思った。中学校が楽しいと言っていて、やりたいことができる、やりたいことが見つかるといことは素晴らしいと考えた。その反面、そのやりたいこと（学校に行きたい）を突き通すためには家族と離れ、1 人で生活しなければならないということに驚いた。当時の高校生の私だったら、辛くて学校に通い続けられないと思った。もっと家の近くに学校ができれば良いと考えた。勉強できる場所、環境がより増えていくことが重要だと考えた。

ニタとの家族との写真

ソンハーとの家庭への訪問と面談

20FL626 多田有香

訪問先　シーライツコミュニティセンター
訪問日　2 月 18 日（土）

1.　活動内容

シーライツが支援した図書館や学べる場があるシーライツコミュニティセンターでピアエデュケーターであるソンハーとカンボジアの現状や問題、また日本とカンボジアの違いについて対談し、情報交換した。その後、急遽ソンハーのお家にお邪魔させていただいた。お母さんもいらして自分の息子を誇らしくしていらした。時間がなかったため、座ってお話はできなかったが、家族関係や雰囲気を知ることができた。

2.　ソンハーの概要
・大学 2 年生でマイクロファイナンスで仕事をしている。
・縫製工場で働いてほしいと言われたことがあったが、勉強を続けるために親を説得し、現在は大学にいっている。
・姉はカジノで働いていて、１ヶ月に１回だけ帰ってくる。

3.　質問内容

①ピアエデュケーターの時にどのような活動をしていたか
シーライツが来てから村で子どもの権利とは何かという啓発活動をしていた。例えば、子どもの権利、女性の権利を知ることで、女性も男性も子どもも自分のことを守ることができるようになる。また、パワーポイントを見せつつ、叩く教育や学校の校則についても教えた。
②家庭内暴力はあるか
2006 年～2010 年はまだ家庭内暴力はあった。しかし、シーライツがタナオにきてから権利を知るようになった、権利を知ると自分のことも知るようになり、自分のことを守ることができるようになった。法律についても知るようになった。
③以前のようにベトナムに物乞いに行く子どもたちが減った。これは子どもの権利に関係しているか。シーライツが来てから変化が訪れ、学ぶことが大事だと思う人が増え、物乞いに行かなくなった人が多い。本を読むことも大きかった。本を読むことによって本の中の人生から学び、自分の人生も変えることができる。いろいろな意見や考え方できるようになった。
④経済的な状況は変わらない中で子どもが物乞いにいくのをやめたら困らないか、その経済的状況は

同じではないか
借金して物乞い行かないようになった。物乞いが良くないいということが各家庭内だけでなく、コミュニティ内で意識が変わってきている。
⑤ピアエデュケーターだったことは高校や大学で役立っているか
役立った。自分に自信がついて誇りが持てるようになった。またそれを伝えていきたいと思うようになった。ここで英語を学んだことがとても役立っている。
⑥ジェンダーバイアスは変わると思うか。
変わっている。昔は、女性は家で家事をすることが主流だったが、最近では縫製工場に行くことが多くなっている。
⑦女性は賃金が安くていいから女性が雇用されるのはなぜか
昔の考え方だと女子は織物が上手というイメージがあるからではないか。
⑧給料は同じか
女性の方が男性より高い。得意だから。
⑨児童労働もそうだけど女性の方が従順で歯向かわないと思われているのか
それはあるかもしれない。あと男性より我慢強い
⑩友達に本を読む人いるか。
みんなも好き。

その後、ソンハーから質問をされた

①私たちがカンボジアの子どもたちと出会ってどう感じたか
人懐っこい、活発。
②日本の教育とカンボジアの教育の違いは何か
カンボジアの方が自分から手をあげて発言する。
③日本の子どもとカンボジアの子どもの違いは何か
日本の子どもは知らない人にはあまり挨拶しないが、カンボジアの子どもは人懐っこいに加えて尊敬の意があると感じた。
④日本は発展した国でカンボジアはそうではないから、そういう国に来てどんな気持ちか
日本は義務教育があるから学べることが普通だと思っている。働いている子どもがいるからそれが違うなと思った。日本では勉強しなければならないからモチベーションが落ちてしまうこともある。
⑤カンボジアの子どものためにどういうふうに発展したらいいか
教育の場所を多くすることが大事、小学校までのバスがあるといいかもしれない。交通網をよくするべきである。それに対して国から予算がないから田舎ではその予算は降りないかもしれない。スクールバスあったらいいとは思う。

→（ソンハー）自転車だけで十分と思ってしまうから難しいと思う。しかし自転車の貸し出しの方が叶いやすいかもしれない。電気自転車の方が安全。普通の自転車より運転しやすいから安全ではないかと思っている。スバイリエンで電動自転車みた。

4. まとめ

中学校に行かないで仕事することが多い。持っているスキルがないから力仕事ばっかりで給料が少ないことが多く、36 歳まで建設などの力仕事で働いていると聞いた。これを聞いて教育がどれだけ重要なことなのか再確認することができた。知識を若い時からつけてなるべく働けるように、力仕事ではなく頭を使った仕事につけることが重要だと考えた。カンボジアでは本や資料はほとんどが英語である。それに比べて日本は多くの分野を博士号レベルの人も日本語の資料で読むことができる。そのため、英語ができないと良質な知識にアクセスすることができない。英語が必須であることを知った。コンピューターの知識も必要であり、英語ができないとタイピングとかもできないし英語がすごく重要。友達とよく勉強しているそうだ。また英語ができるようになり、本を読むことで多くの考えを持つことができ、自分の知識が増え、視野も広がることが伝わった。私も含め、日本では本を読む人が少ない。しかしソンハーの話を聞いて私ももっと本に興味を持ってみようかなと思えた。日本では母語で多くの本があるのがまずありがたいことだと思ったし、自分の知識や感受性も増やしていきたいと思った。また、下着の色が決まっていたり、スカートの長さが決まっていたり、日本の校則について話すと、なぜそのような細かいルールがあるのかと不思議がっていた。私も意味わからないと思っていたし、カンボジアよりも学校の校則が厳しいことがわかった。そして、ソンハーみたいな成功した人が勉強を教えてくれたり、相談に乗ってくれたり、本はすごくいいと知らせていったりすることが大切だと考えた。同じ境遇があるからこそ、伝わることがあると考えた。もちろん私たちも啓発活動を行ったり、ソンハーのような人々のお話を聞いて伝えていくことが重要であると考えた。私も学ぶことがたくさんあって楽しい時間だった。

シーライツコミュニティーセンターでのソンハーとの写真

ソンハーの家の前でソンハーの家族との写真

シーライツ・コミュニティセンター

20FL604 大島万奈

訪問場所：シーライツ・コミュニティセンター(Child Friendly Space)
訪問日：2 月 19 日(日)

１．活動内容

シーライツコミュニティセンターに通う子どもたちが英語の授業を受けている様子を見学した。小学生から高校生くらいまでの幅広い年齢の子どもたちが同じ授業内容で英語を学んでいた。
英語の授業の見学後には、私たちから日本についてパワーポイントを用いて子どもたちに説明した。日本の文化や、体罰、学校の校則などの問題について説明した。これらの説明に関する質問を子どもたちからもらったり、こちらからも子どもたちに様々な質問をした。
その後は、日本から持ってきた折り紙を子どもたちと一緒に行った。折り紙の折り方を教え、「鶴」や「コマ」などを作った。子どもたちの手先は非常に器用で折るのが上手だった。子どもたちは「これはどう折るの？」とか「これ折ってみたい」と積極的に参加してもらえて嬉しかった。子どもたちはこのコミュニティセンターで英語を学んでいることから、簡単なコミュニケーションは英語で取ることが可能であったため、思っていたよりも意思疎通ができた。折り紙を終えた後は、お礼にお菓子や縄跳びをプレゼントした。

２．質問内容
シーライツコミュニティセンターに通う子どもたちへ質問を行った。

①去年行われた LGBTQ のワークショップに参加した人数は？
約 14 人
②（去年行われた LGBTQ のワークショップに参加した人に対して）LGBTQ のワークショップを通して学んだことや感想はありますか？
LGBTQ の人もいると思うので、いたら差別しないように、みんな好きなことをする、それぞれ人の考えがあるから。体が男性でも男性が好きな人もいるし、体が女性でも女性が好きな人もいるから絶対に差別してはいけないということ、
LGBTQ の人がいたら、いじめないで応援してあげること、お互い住めるような社会を作りましょう。
③皆さんの周りに LGBTQ の方はいますか？
いる。
自分の周りに 1 人～2 人くらいいる。

④皆さんが挑戦したいことや、夢などについて両親は肯定してくれたり、応援してくれますか？

肯定してくれる子もいるし、そうでない子もいる。

肯定してくれると答えた人は 3 人。

肯定してくれないと答えた人は 4、5 人。

その他の子どもたちは分からないと答えた。

⑤昨日一日の中で、お父さんがごはんを作ってくれた人は？

4 人

3．まとめ

一人の男の子が LGBTQ についての質問を多くしてくれたのが嬉しかったのと同時に、普段周りに LGBTQ についての質問や悩みなどを安心して打ち明けられる場所がほとんどないのではないかと感じた。またカンボジアでも LGBTQ に対するいじめやからかいがあるということを知った。カンボジアと日本では LGBTQ に対して否定的な人がいることや、特に上の世代には理解が進んでいないといった点などから、LGBTQ の問題に共通点が多いと感じた。また、カンボジアにおいて LGBTQ 当事者の多くが自分の性自認や性的指向を隠しているのではないかと思っていたが、子どもたちの周りにも何人か LBGTQ 当事者がいると話していて、少ないとは思うがなかには LGBTQ であることを公表している人もいることを知り、新たな学びとなった。また、子どもたちは LBGTQ に対して今後、否定的な意見を持たないでいて欲しいと感じた。自分の研究テーマである LGBTQ についての話を子どもたちに知ってもらったり、逆にカンボジアにおける LGBTQ の話を多く聴けたことは大きな学びとなった。

英語の授業を見学している様子

折り紙の様子

シーライツコミュニティセンターに通う子どもたちとの集合写真

ヘン・ソフォンの家庭訪問と面談

20FL604 大島万奈

訪問場所：ヘン・ソフォンの家
訪問日：2 月 19 日(日)

1.　活動内容

ヘン・ソフォンの家にお邪魔させていただき、学校生活や、彼の両親や祖父母についてのお話も伺った。彼の両親の仕事の話や彼の将来の夢についても知ることが出来た。また、ヘン・ソフォンが知る子どもの性的搾取におけるお話などについても伺った。

2.　ヘン・ソフォンについて

・ヘン・ソフォン は現在 11 年生(高校 2 年生)
・小学 4 年生と中学 2 年生の 2 人の妹がいる
・ヘン・ソフォンの父は 42 歳、母は 40 歳、祖父は 61 歳、祖母は 60 歳

3.　質問内容

(1)ヘン・ソフォンに対しての質問

①ピアエデュケーターとしても活動していましたか？
・入ってない。子どもクラブのメンバーではあった。(註：途中からピアエデュケーターの活動を子どもクラブと呼ぶことに変更した)
②子どもの権利のワークショップを受けましたか？
・5、6 回くらい受けた。
③子どもの権利のワークショップを通して、子どもの権利についてどのようなことを学びましたか？
・子ども買春と人身売買について学んだ。両親から暴力を受けない権利、住む場所があることや洋服を着ることができる権利についても学んだ。また、会議に参加する権利、意見を言う権利、児童虐待についても学んだ。
④子どもの権利について学んだことは生活に役立っていますか？
・とても役に立っている。暴力から自分を守る方法についてちゃんと覚えるようになった。
・小さいころは、良い子になるために親から大きい声を出されるなど軽い暴力で注意を受けていたけど、それはヘン・ソフォンも自分のために行ってくれていたと理解している。

⑤権利を学ぶことで差別を減らすことはできると思いますか？

・少なくすることが出来ると思う。

⑥高校生活で困っていることや辛いことはありますか？

・実家からだと距離があり高校に通えないため、高校の近くに一か月 20 ドルくらいで部屋を借りていることや、食べ物を買ったりするなどお金がかかってしまうため大変。

・高校 1 年生のときは自転車が無かったため、歩きで高校に通っていたが距離があるため、高校を休んでしまうことも多かった。そのため、学年が上がり 2 年生になったとき、他の人と比べたとき知識が不足しているため、勉強についていくのが大変。

⑦学校では何の科目が好きですか？

・国語と英語が好き

・国語が好きな理由は、自分はクメール人(カンボジア人)であるため、もっとクメール語を理解したいと思っているから。

・英語が好きな理由は、英語はやっぱりとても大切であると考えているから。外国人とコミュニケーションを取るためには、英語は必要になってくるから。

⑧将来の夢は？

・英語の先生になりたい。

・タナオ中学校の英語の先生になりたい。

・タナオ村には英語の先生がいないため、村の学生たちは学ぶ機会がなく英語が出来ない。そのため、高校卒業後はスバイリエン大学までいって勉強したのちに、タナオ村の中学の英語の先生になりたいと思っている。

⑨憧れの先生はいますか？

・算数の先生、歴史の先生、国語の先生、英語の先生と多くいる。

・真面目にちゃんと教えてくれない先生もいる。その中でも、上記であげた先生はちゃんと教えてくれるし、優しい。学校の授業としてはちゃんと教えてくれないけど、お金がもらえる塾としてではちゃんと教えてくれるような先生が多い。(カンボジアでは公立の先生が、午前中は学校としての授業を、午後にはお金をもらって塾を行うことが一般的である。)

⑩ ヘン・ソフォンは普段家事をしますか？

・家にいるときはご飯作ったり、洗濯したりしている。

・中二の妹がいないときは ヘン・ソフォンが家事の手伝いを行い、 ヘン・ソフォンがいないときは中二の妹が家事を手伝っている。

⑪中学のとき、学校生活に何か不満はありましたか？

・自転車が無くて、学校まで歩いて行っていたため、それが大変だった。

⑫中学のとき学校の先生に対して何か不満はありましたか？

・ちゃんと教えてくれない先生もいたこと。お金儲けのための塾のことばかり考えていた先生もいた。
・選挙活動のために先生が二カ月学校を休んだりすることもある。
⑬中学の先生に言葉の暴力をかけられたことはありますか？
・ない。
⑭英語に興味を持ったきっかけは何ですか？
・中学校一年生くらいのときに、カンボジア人同士(英語の先生と見学に来ていた人)で英語を話しているのを見かけたとき、自分もあの人ように話せるようになりたいと思ったから。
⑮子ども買春や人身売買が実際に起きていることを聞いたことはありますか？
・小学校 4 年生のときに聞いたことがある
・12 年前にこの村のカンダル村で 12 歳くらいの子どもが 16 歳か 17 歳くらいの男の子にレイプされた。
・2020 年にもレイプの事件があった。6 歳の女の子が 17 歳の男の子にレイプされ、17 歳の男の子は刑務所に入った。しかし現在は 17 歳(事件当時の年齢)の男の子はお金を払って刑務所から出てきている。(賄賂のようなもの)
・被害にあった女の子は親に話したことでこの事件が発覚した。
・この事件についてちゃんと知らないということもあり、村の人々はかわいそうしか言わない。

(2) ヘン・ソフォンの両親や祖父母に対しての質問

①ヘン・ソフォンの父母は何年生まで教育を受けましたか？
・家が大変だったため、父母共に学校には行っていないが、ヘン・ソフォンには大学 4 年生まで行って欲しいと考えている。
② ヘン・ソフォンの父母の仕事は何ですか？
・父母共に農業を行っている。
・母は縫製工場で働いていたこともあったが、あまり体が強くないため、2 週間で辞めてしまった。
③ (母に対して)ヘン・ソフォンにも働いて欲しいとは思わないですか？
・働いて欲しいという気持ちはあった。しかし、 ヘン・ソフォンは学校に行きたいと思っているため応援しようと思った。
④お米を育てていて、1 年間分の食料は足りていますか？
・今はあまり収穫できていない。カンボジアではガソリンと肥料が高くなってきているため、お米を収穫して売ってもマイナスの状態である。そのため、あまり収入にはならない。
⑤有機農業の肥料は作ったりしますか？
・昔からベトナムの肥料を使っているため、作っていない。村の人みんな同じ状態である。
・昔は一袋 50 キログラムの肥料が 5 万リエル(12.5 ドル)であったが、現在は料金が値上り 4 倍の 20 万リエルとなっている。

・肥料は借金して買っている。そのため、利子もあり収入はマイナスになってしまう。
⑥ ヘン・ソフォンの父が体を壊してしまった理由は？
・重たい作業を一人で行っている(農作業)ため。
・農作業するためのエンジンポンプを一人でやっているため、腰を痛めてしまう。
⑦ヘン・ソフォンの父は家事を行いますか？
・お皿を洗ったり、朝ごはんを作ったりしている。
⑧ （ヘン・ソフォンの父に対して）今日は家事を行いましたか？
・腰が痛くて行っていない。
・水牛の世話をしていたため出来ていない。

4. まとめ

ヘン・ソフォンや ヘン・ソフォンの父母について様々なお話を聴くことができた。中学や高校を休んでしまったり、行けなくなってしまうことがある背景には、お金の問題であったり、家の仕事の手伝いなどが関係しているのではないかと考えていたが、実際にお話しを聞くと家から学校までの距離の遠さが深く影響しているということを学んだ。また、カンボジアの農村地域において、自転車やバイクの存在の大きさを知った。農村地域において学校が不足している問題を改めて実感させられた。ヘン・ソフォンの父母の話から、ガソリンや肥料が値上っていることや気候変動によって思うように収穫が出来ず収入を得られないということを知り、村の多くの人が縫製工場で働く理由が少し分かったように思った。ヘン・ソフォンの話から、子どもの性的搾取があることを知り、加害者側も未成年であったことに非常に驚いた。通訳を行ってくれたラタナさんの考えでは、今では覚せい剤が村でも広がっていて、それも原因の一つなのではないかと考えており、性的搾取だけではなく、薬物についての教育も強化していくことが大切なのではないかと考えた。

ヘン・ソフォンとヘン・ソフォンの家族との集合写真

フレンズ・インターナショナル・Tuk Tuk ツアー

20FL604 大島万奈

訪問場所：フレンズ・インターナショナル
訪問日：2 月 20 日(月)

1. 活動内容

最初にフレンズ・インターナショナルの事務所でフレンズ・インターナショナルの活動内容についてお話を伺った。その後 Tuk Tuk ツアーを通して、物乞いの子どもたちについてやカンボジアに来ている観光者による子どもの性的搾取、外国人観光客がカンボジアの子どもたちにできることなどについて学んだ。

2. フレンズ・インターナショナルの概要

フレンズ・インターナショナルには 2 つの柱があり、1 つは子どもたちの命を守ること、もう一つは子どもたちのより良い未来を作ることである。フレンズがとても大切にしているものは、支援した人たちが社会にとって有能で生産的な市民になることである。フレンズは支援の対象者に住居や食べ物といった基本的なニーズをサポートするだけではなく、教育やスキルを提供したり、仕事を見つけ、自分の家族を自分自身で養うことができるようにと、フレンズがいなくなっても支援対象者自身で生

活を立て直して生きていけるようにすることを目指している。フレンズが支援対象にしている子どもたちだけでなく、すべての子どもたちが安全な生活を送ることが大切であると気付き、2005 年に新しいプロジェクト「child-safe movement」を始めた。「child-safe movement」を行うにあたって大事なことは、誰もが子どもを守れるような力をつけることである。フレンズはいろいろなパートナーと一緒に活動を行っている。企業や旅行会社とも連携している。フレンズは最初カンボジアから始まったが、現在はタイやラオスなどといったいろいろな国で活動が行われている。しかし、フレンズがそういった国に行かなくても、現地の良い NGO と連携することによって子どもたちが良い社会を作っていき、生産的な市民になっていくことを目的としており、このようなことから多くの NGO と連携することがとても大切であると考えている。そのためフレンズは 70 以上の NGO と協力して活動を行っている。
フレンズは 2021 年には 200 万を超えるサービスを提供した。支援を必要としている人と信頼関係を築き、どのように貧困から抜け出すかを話し合う活動を行った。コロナ渦のカンボジアでは、ロックダウンが行われたため働きに行くことが出来ず収入が得られなくなってしまうが、家賃は支払わなくてはいけなかったため、家賃の支払いの支援を行った。また、コロナ期間には子どもたちがオンラインで学習する能力を持っていなかったため、187000 枚を超えるワークシートを配布し教育支援を行った。
フレンズでは 24 時間 365 日利用できるホットラインの運営を行っており、子どもたちが困っている場合には電話がかかってきて、ソーシャルワーカーが向かうといった取り組みが行われている。
フレンズは旅行者、ボランティア、企業、市民、機関、公的機関、学校や大学などと協力し、大きなネットワークで子どもたちを守ろうとしている。

3.　質問内容

①携帯を持っていない子どもたちもいると思うが、そういった子どもたちがホットラインに連絡する方法は？
・ホットラインのカードがあり、地域や警察などいろいろなところに配っているため、危険な目に遭っている子どもがいたら、携帯を持っているおとなが通報する仕組みになっている。
・子どもが携帯を持っていないだけでなく、その子どもの家族も携帯を持っていないこともあるので、対象地域一つのコミュニティに対して、一人はチャイルドセーフエージェントのマークを持っている人がいるため、そこに相談できるようになっている。

②ホットラインにかかってくる電話は一日あたりどのくらいですか？
・地域によって差はあるが、プノンペンでは一日あたり 5 件くらい電話がかかってくる。
・子どもたちは観光客から危ない目に遭うことが多く、観光者が増えれば電話がかかってくる数はより増えるであろうと予測されている。

4.　まとめ

所々問題形式で説明してもらったため、一緒に考えながら説明を聞くことができ勉強になった。お話を聴いて特に大切であると思った点は、もし困っている子どもを見かけた際には、自分たちでなんとかしようとするのではなく、法律を知っている NGO や知識のある NGO に相談することが大切であるということである。なぜなら、文化や法律、言語を知らない私たち観光客が何かしようとすることは大きなリスクにもなり、子どもたちのためにはならないかもしれないからだと学んだ。
Tuk Tuk ツアーでは学生たちが交代で、フレンズのスタッフと乗り各自の研究テーマについてもお話を伺うことができた。私も首都プノンペンにおける LGBTQ についてのお話を伺い新しい学びに繋がった。
Tuk Tuk ツアーを通して、カンボジアでは環境問題についても今後取り組むべき課題となっていることが分かった。また、日本で行われているようなゴミの分別が行われていないことに気付いた。
フレンズのお話を聴き、幅広い活動を行っていることを知り、フレンズはカンボジアにとって重要な存在なのではないのかと感じた。
「子どもは旅行者にとって見せ物ではない」と説明を受け、カンボジアでは貧しい子どもたちが多いイメージがあることから、物珍しさに無意識に見てしまうことは多いのではないかと感じ、改めて気を付けなければと気付かされた。 Tuk Tuk ツアーの中でカンボジアの子どもたちが好きなおやつも食べ良い経験になった。良い NGO 団体を見極める方法及び、良い NGO 団体に助けを求めることが大切であると感じた。

Tuk Tuk ツアーにて

フレンズ・インターナショナルの方たちとの集合写真

NGO セントラル【CENTRAL】事務所と事業地のレンガ工場

https://www.central-cambodia.org/

20FL604 大島万奈

訪問場所：セントラル事務所、カンダル州のレンガ工場
訪問日：2 月 20 日(月)

1.活動内容

最初、セントラルの事務所にてセントラルの活動内容などのお話を伺った。その後は、レンガ工場に向かいそこで働く女性や子どもたちの様子を見学させていただいた。レンガ工場の中も実際に見させていただき、働く環境を見ることが出来た。

2.セントラルの概要

セントラルはカンボジアでできた NGO であり、労働問題と人権問題に取り組んでいる。セントラルは 4 つのプログラムがあり、一つ目は労働者の組織化である。二つ目は、労働搾取の問題を抱えている労働者に支援や保護を提供すること。三つ目は、労働者やリーダーの能力を強化する支援を行うこと。ICT とメディアへの積極性、つまり情報技術とメディアを支援し、労働者がテクノロジーを使用して自分の権利を擁護できるようにすることである。四つ目は、出稼ぎに行く労働者が人身売買に遭わないようにすることである。カンボジアの労働者がタイやマレーシアに出稼ぎに行き労働的な搾取に遭わないようにすることが一つである。もう一つは、カンボジアの労働者(技能実習生)が日本で労働搾取に遭うことを防ぐために「ポーセー」という NGO と協力し活動している。これまで少なくとも 5 万人のカンボジア人技能実習生が日本で働いている。しかし、技能実習生は労働搾取に遭っているし、労働法に合わない働き方をしている。

3.説明内容

カンボジア全体で約 464 のレンガ工場があり、1 万人以上の人が働いている。そのなかでも、4772 人が女性の労働者である。またレンガ工場で働く親や子どもたちはレンガ工場に住んでいる。その子どもたちは債務児童労働、つまり親が借金して子どもたちがその借金の肩になって働かされている。本来ならばこういったレンガ工場で働く労働者も法律で守られる立場であるにも関わらず、労働者はそれを知らないということが調査を行うなかで分かった。また、強制労働があるということも分かった。もう一つの課題としては、労働者は身分証明書がないため、国の社会保障基金からお金を得られていないということである。そして労働者たちはまるで奴隷のように働いている問題がある。これらの問題を解決するために、まずは労働者のリーダーが ID カードや社会保障基金にアクセスできるようにすることである。次に行っていることは、労働者を組織化し労働組合を作るということ。3 つ目

の活動は、労働省に労働者を登録して恩恵を受けられるようにすること。四つ目の活動は、労働者の相談に乗ることや調査を行うこと、また、労働省との交渉に誰を代表にするか決めるということを行っている。現在は 10 か所のレンガ工場で組織化が進んでいて、その労働組合は労働省への登録が済んでいる。さらにセントラルはプロジェクトとは別にレンガ工場に訪問した際には、子どもたちに衣服などを提供している。労働者を支援する上で大事なことは労働者をエンパワーして労働組合を作ること。労働組合ができることで、雇用主に対して、要求することもできるようになるため、自分たちの労働条件や生活が豊かになる。このような活動を通じて労働者の生活が良くなること、特に奴隷のように働く債務労働から解放されることをセントラルは目指している。レンガ工場において一番の問題は、レンガ工場がある場所に家族と一緒に子どもたちも暮らしているということである。レンガ工場の労働者にとって難しい点は、工場主は非常に高い地位にあって権力があり強いということ。そして、学校が近くにないため子どもたちは学校に行けず教育を受ける機会がない状況にあるということである。工場主は子どもたちを学校に行かせないで、働かせるように仕向けている。また、レンガ工場で働く女性たちは教育レベルが低いため、女性は夫から暴力を受けることが多い。さらに、レンガ工場で働く女性たちは社会保障カードを持っていないため、妊娠しても妊婦検診を受けることができないし、工場主が妊婦検診のお金を払うということもない。2019 年には 9 歳の女の子がレンガ工場の機械に挟まれて、腕を失ってしまうということが起きてしまった。レンガ工場では最低賃金が守られておらず出来高制であるため、両親の収入を助けるために子どもたちが少しでも収入を増やせるように、学校に行かず働いているということがある。しかも、劣悪で危険な環境で子どもたちが働くということもある。例えば、レンガ工場の窯は非常に熱く本来ならば子どもは近づいてはいけないような場所であるにも関わらず、そういった場所でも子どもたちが働いている。工場で働く人の多くが国内移民(地方からやってきた人)であり、他に住むところがないため工場から逃れようがなく、工場に住むしかない状況に置かれている。よって、工場主は働かせたいだけ働かせることができてしまうため、労働者は奴隷のように働かされてしまう。このような問題から、セントラルは労働者を組織化し、法的訓練と教育を提供し、組合のメンバーになることで、雇用主と交渉できるようにすることを目指している。

4.まとめ

レンガ工場の労働者についてのお話を主に伺い、債務労働で子どもたちが働かされているということを知り、非常に驚いたし悲しく思った。お話を聴くだけでもレンガ工場における問題は深刻であると伝わってきたが、実際に子どもたちが働いているレンガ工場を見学し、話だけでは分からない想像を超える光景を目の当たりにして、今回のカンボジアフィールドワークのなかで一番心が痛くなったし、言葉が詰まるような状態になった。明らかに良い環境とは言えない家であったし、工場内の土地に家があるのはとても衝撃であった。しかし、そこに住む子どもたちは私たちを見て笑顔で受け入れてくれて、子どもたちのほうから手をつないでくれたり、近寄ってきたりしてくれて、少しだけ心が和んだ。だが、それと同時に切ない気持ちになった。この子たちは、ここ以外の景色を知らず、娯楽というものもないなかで、毎日働いて、工場内にある家に帰る日々を繰り返していて、これは日本ではあまり考えられないことで、この環境に置かれている子どもたちは幸せとは言えない状況なのでは

ないか思ってしまった。でも子どもたちは楽しそうにしていて、他の年代の子どもたちと変わらないように遊んでいる姿を見て、さまざまなことを考えさせられた。レンガ工場を見学できたことは、非常に貴重な経験で、今後の人生においても忘れることはないと思ったし、忘れてはいけないと強く思った。同じ地球に住んでいても、このような状況に置かれている人がいるとは頭では分かっていたが、実際に目にしたことで、大きな実感へと変わっていった。私も、ほんのわずかであっても、このような子どもたちのために何かできることはないのか考えたり、調べていきたいと感じた。

セントラルの方たちとの集合写真

BOYS

レンガ工場にて

CAM ASEAN Srun Srorn さんレクチャー 報告

20FL801 インペリアル ジュダーミカイア

会場：パニャサストラ大学
訪問日：2月２１日（火）

1. 活動内容

CAM ASEAN はカンボジア・プノンペンで活動している人権擁護のための市民社会組織である。LGBTI についての活動内容は、地域社会での活動、農村部の若者のグループが孤立しないための活動、LGBTI の権利を主張することが出来るための活動の 3 つである。

2. ディスカッションの内容

①カンボジア内ではどのように LGBTI の教育がされているか

ユネスコと協力し、教育省に働きかけをした。内容は、13 の州から 300 人の教員を集め、どのようなポジティブな効果があったかエビデンスを示した。それを見た教育省が LGBTI 教育の必要性を感じ、教育カリキュラムに取り入れることになった。

②LGBTI の人たちの自傷行為はカンボジアでもあるのか

カンボジアも日本と変わらない。首吊りやリストカット、薬の大量摂取などがある。中には LGBTI について認識が薄い親が LGBTI を病気だと思って、病院へ連れていき強制的に普通に戻そうとしたり、異性と結婚させれば治ると思って強制的に結婚させたり、子どもと縁を切って家から追い出し、その子供がホームレスになってしまうもある。

③都市部と農村部で LGBTI の人たちの扱い方に地域差はあるか

農村部ではまだまだ理解されていない。人が多く訪れるような場所は受け入れられつつある。農村部ではそういった情報が入りにくいから、LGBTI の教育・啓発が大事になってくる。また、LGBTI の当事者グループを作り、村の住民に公表していくこと、住民みんなが理解していくこと、知事などの上にいる人たちが理解することも大事だ。

④親に公表することについて

ポルポト政権のときからだいぶ変わった。今はスマートフォンがあり、電話や SNS を使うことで公表しやすくなった。また、離れた場所で公表もできるため、その場で親から暴力を受けることを防ぐこともできる。

⑤学校の制服（ズボンかスカートか）は選択できるか

日本とカンボジアは似たような状況である。14 から 16 歳になれば自分で制服を選ぶことが出来るが、その下の年代はできない。

カンボジアでは男性が優位に立つことが出来る社会。
性転換をした元男性が運営するレストランはお店が増えたりしているが、元女性の人たちが運営するレストランはつぶれたりしている。

3.　まとめ

LGBTI の教育を拡大させるために行った CAM ASEAN の活動はカンボジアにとって大きな影響を与えたのではないかと考えた。しかし、そのあとの大学生との交流で、大学に入るまで LGBT についての教育を受けてこなかったということを聞いた。教育省が LGBT 教育をカリキュラムに取り入れるようになったことは素晴らしいことで日本よりも進んでいる現状ではあるが、もっと多くの学生が学校教育の中で LGBT のことを知る必要があると感じた。また、親にカミングアウトをすると暴力を振るわれることがあると聞いたが、子どもが勇気を振り絞って言っても、その答えが暴力で返ってしまうと心に大きなダメージを追ってしまうのではないかと考えた。子どもたちがカミングアウトしやすい社会になるためには、親世代の方々の LGBT に対する認識を高める必要があると考えた。地道な工程で時間がかかってしまうかもしれないが、LGBT の子どもたちが暮らしやすい国になればいいなと考えた。

CAM ASEAN の皆さまと集合写真

パニャサストラ大学　学生交流　報告

20FL801 インペリアル ジュダーミカイア

訪問先　パニャサストラ大学

訪問日　2 月 21 日（火）

1.　活動内容

　カンボジアのプノンペンにあるトップレベルの私立大学、パニャサストラ大学に訪問した。3 グループに分かれ、計 8 人のパニャサストラ大学の学生と交流をした。それぞれのグループでは卒論のテーマに沿った質問をし、ディスカッションをすることができた。交流後はダンスや歌を披露し楽しい時間を過ごした。

2.　ディスカッションの内容

私たちのグループでは LGBT、ジェンダー平等、シングルマザーについての質問をした

〇LGBT

Q. 身近に LGBT の人はいるか？

A. 周りに何人かいる。

　交流したうちの一人が自分はゲイであることを教えてくれた

〇ジェンダー平等

Q. 親は家事を分担しているか？

A. 共働きのため仕事に余裕のある方が家事をする量も多い。

　でも基本的にどちらかに全てやらせている訳ではなく、量を分担している。

〇シングルマザー

Q. 身近にシングルマザーの友達はいるか。また、どれくらい生活が厳しいか

A. 身近にシングルマザーの友達はいない。だけど、ひとりですべてを支えなくてはいけないから、大変だとは思う

大学生からは日本の LGBT・ジェンダー平等・シングルマザーの現状を教えてほしいと聞かれ、共有した。

他のグループでも性的役割分業のことや校則についてなどの質問をしてディスカッションが行われた。

３．まとめ

大学生との交流では自分の英語力を鍛えることが出来たと考える。交流する前は、その時まであまり英語を勉強していない自分の英語力のみで楽しく交流することが出来るのかとても不安だった。しかし、いざ交流してみると学生のみんな私たちの拙い英語を理解しようとしてくれたり、私たちにもわかりやすいようにゆっくりわかりやすく話してくれた。ディスカッションの途中で、ひとりの子と意気投合してその場で仲良くなれ、完璧な英語を話すことが出来なくても友達をできることを学ぶことが出来た。また、学生の親の仕事内容やその学生たちが最新の iPhone を所持していたことなど、私立大学だからか生活レベルはあまり日本と変わらないと感じた。最後にダンスや歌の披露があったが、特に立派なマイクやスピーカーがなくてもみんなで一体となってその場を盛り上げることが出来、いい思い出となった。

パニャサストラ大学　集合写真

SVA カンボジア事務所（加瀬貴所長レクチャー）訪問　報告

20FL801 インペリアル ジュダーミカイア

訪問先　シャンティ国際ボランティア会（SVA）
訪問日　2 月 21 日(火)

1.　活動内容

SVA では本を通じて教育の機会を与えている。主な活動は、活動地の人々が読める翻訳教材の出版、行政や住民と一緒に活動地の人々が学び続けられる仕組みづくり、学校の建設や建物の維持管理、本と出会う機会創出である。また、カンボジア SVA では幼稚園教育にも力をいれている。カンボジアでは幼稚園教員の学校が 1 校しかなく、卒業生も少ないためにカンボジア全体の幼稚園教員が不足している現状である。そのため、幼稚園教員としての教育を受けなかった小学校の教員が掛け持ちで幼稚園の教員をすることが多い。幼児教育の主な活動としては、子どもたちが「楽しく遊びや経験を通して遊ぶ」幼稚園づくりをめざし、図書館建設・移動図書館などの図書館事業、場づくり、教材の開発などがある。また、幼児教員に向けて行っている活動として、教員向けのガイドブックの作成（①場づくり②おはなし③教材開発）、人材育成、幼稚園での実践と質の向上がある。

2.　ディスカッションの内容

①日本には海外から移住してきた外国ルーツの子どもがいて、言語の壁などにより学校に通えないなどの問題があるが、カンボジアには似たような事例はあるか

カンボジアにはないが、隣のタイになら似たような事例はある。難民キャンプには移民学校があり、そこで子供たちは教育を受けているが、タイでは移民を認めていないため、その学校は認可されていない。タイにいる子どもたちは誰でも教育を受けることが出来るという教育法があるが、実態ではまだまだうまく運用できていない。そのため、移民の子どもたちが警察に捕まりそうになることがあるが、先生たちがリリースするように助けてくれる。このように、子どものうちから存在価値を否定されるような体験をせざるを得ない状況がある。

②ノンフォーマル教育は学校に行けない子どもたち限定で行われているのか、学校の教育についていけない子どもたちの知識を補うために行われているのか

教育省の持っているプログラムとして、復学支援プログラム(短期集中コース)とエクイバレンシープログラム(大学検定のようなもの)のふたつがある。それぞれの州にある CLC(コミュニティ学習センター)では学校が始まるまでに 2-3 か月で復学支援プログラムを終わらせる活動を行っているところもあれば、エクイバレンシープログラムを終わらせれば中学３年生の資格を得ることが出来る活動を行っているところもある。一方で、ノンフォーマル教育には課題もある。退学をしてしまった子たちには様々な要因があり、勉強についていけず自らやめてしまった子もいれば、勉強は好きでも親の経済的な面・職業柄(農家さんだと繁忙期で手伝わされる)の事情によって学校をやめてしまう。だから、学校が良くなるだけじゃダメで、複合的な家庭を取り巻く原因に対するコミットも併せて必要だが、その二つのプログラムだけじゃ難しいし、自分たちが今どこまでできているかと聞かれるとできていない。複合的なアプローチが必要。

③農村地域の教員が不足している問題について、都市部から農村地域に教員を動かすことが難しいのはなぜか。

今の規定では、教員養成学校を卒業後２年間は配属になった各州の僻地で教えなくてはいけないことになっている。それでうまく回そうとしているが、２年したら帰ってきてしまう。これを繰り返しているため、農村地域の学校に行く人がなかなか増えない。制度ができることによって一時的に農村地域の教員を増やすことはできているが、教員免許をなりたての人が急に慣れていないところで教えると指導の質にも影響がでる。あまりいい制度ではない。ハードシップ手当によって、給料が上がっているから増えるのかなと思いきや、国内の格差問題が出てくる。例えばプノンペンで生まれ育った人がいきなりスバイリエンで教えてくださいと頼まれても、いくら給料が上がっても教えたいかとなるとそうはならない。また、家族の絆も強いため難しい部分がある。ローテーションで回せばうまくで

きると思うが、今はそこまでの制度がないからインセンティブを付けてやろうとはしているが、うまくいっていない現状。

3. まとめ

活動内容について前にカンボジアのコロナ禍の教育問題についてもつい聞くことが出来た。全体的に貧困率が上がり、学校は年の８割ほど休校になって子供たちの学習の機会が減ったために、学習達成度が全体的に下がったことを聞いた。学習達成度が下がった原因として、お話の中にもあった一方的なオンライン学習制度が考えられる。実際の動画を見たが、あらかじめ録画された学習動画であったため、子どもたちが本当に理解できたかわからない状態で進めていた。ただこの動画を見せるだけだと聞いたが、この動画を流していた教員は子どもたちに対してアフターフォローを行わなかったのかが気になった。また、この前日に行ったフレンズではコロナ禍でロックダウンになり、外に出ることができない状態であったことを聞いた。またその中で、オンライン学習が行われていても経済的にデバイスを持つことが出来ない子どもたちのために、フレンズではワークシートを作成して学習の機会を与える活動をしていた。そのフレンズのお話を聞いて、カンボジアではどれだけの子どもたちがオンライン学習に参加することが出来て、オンライン学習に参加することが出来ず学校をやめることになった子供たちはどれくらいいたのかが気になった。

SVA の方々と集合写真

中川香須美さん レクチャー　報告

20FL801 インペリアル ジュダーミカイア

訪問場所：プノンペン市内の中華料理店

訪問日：2 月 21 日(火)

1.　活動内容

パニャサストラ大学に勤務し、子どもの権利条約について研究している。ジェンダー問題、パワー、環境問題（特にゴミ）中国からの急増する投資、移民の問題（カンボジアにどのような影響を与えるのか)、家族計画（10 代の望まない妊娠）などのテーマで授業を教えている（6 期生報告書から引用)。大学の講師以外にも、自然災害・気候変動・汚職問題など幅広いお仕事をされている。現在は日本に在住しながら頻繁にカンボジアに訪問して活動をしている。

2.　質問内容
それぞれの研究内容に基づいたカンボジアの現状を教えていただいた

〇校則
　カンボジアにある多くの学校は男子に対する髪の毛の校則が厳しい。理由として、カンボジアは LGBT に対する批判が強く、男子が髪の毛を伸ばすことはおしゃれではなく、女っぽいと理解されてしまうからである。多くの学生からは、週に 1 回行われる全体会で髪型が長い男子学生を前に出し、みんなの前で散髪屋が髪を切るというのを行っているという。また、教室のイスに座っている男子の髪の毛を教師が無理やりバリカンで剃っている動画が SNS で拡散されカンボジア内で話題となった。

〇体罰(子どもの教育)
・体罰は当たり前のだとされている。親は子どもをしつけるには必要なことだと考えるためである。香須美さんの息子さんが通っていた小学校には、懲罰室が設けられており、そこでは懲罰担当の先生が悪いことをした子どもにバツを与える。
・学生への調査では、教室内でも先生は基本的に定規をもって威嚇をし、ひどい時はつねられることもあることが分かっている。今どれくらい減っているかはわからない。
・今のカンボジアの大きな問題は、圧倒的な教員不足と教員の質の低さである。カンボジアの学校教育は無料だが、子どもたちは半日しか学校にいない。そのため午後は補修という形で、公立の先生がお金をとって塾のようなことを行っている。月額で払うお金は都市部と農村部で差があり、例としてプノンペンであれば 5 万円ほどの副収入があるが、スバイリエンだと 1 万円ほどになってしまう。こういったことにより教員は農村部に行こうとしない。

・教員学校を卒業して最初は地方で教えるが、みんなお金をだして都市部に戻ろうとする。そうなると都市部には大卒で教員免許を持っている、カンボジアで１０％も満たない優秀な教員が集まるが、地方では高卒か高校も出ていないような人がパートタイムの教員として採用されている。また、地方の小学校の教員の約 75％が正規雇用の教師ではない。そういった教員はきちんとした研修を受けていないため、教育の仕方が分からず、暴力的な環境で育った教師は同じように子どもたちにしつける

教員もいる。
・カンボジアは教育制度全体に問題があるため、体罰はあくまでもそのうちの一つ。

〇LGBT
・LGBTIQ の子どもたちは自分の性認識を 5- 6 歳で気づく子もいれば、10 歳くらいで気づく子もいる。日本と同じくみんな最初に自分の中の葛藤で悩む。家族の絆が強いため、多くのこどもたちは自分たちの親にカミングアウトをするが、家族から否定されたり監禁されたり、家族内の差別でひどい目にあってしまう。
・学校に行けばクラスメイトからの差別やいじめがあったりする。多くの学校では非常に多くの学校では、特に男女関係なくトランスジェンダーの子どもたちは性に合わせた制服・髪型で来ることを先生たちが強要している。こういったことが起こると家・学校にも行き場がなくなってしまう。
・カンボジアにはトランスジェンダーについての映画があり、内容は高校生のラブストーリーである。高校でトランスジェンダーぽい男の子が学校内でいじめにあうシーンもある。こういった社会問題が映画を通して理解されるのは大事なこと。
・タイの国境近くにある州の学校は優秀で、タイの文化も入っていることから国際的なことも行っている。LGBT の子どもたちが中学生の頃から SNS などを通して自己主張をすることが多い。そういった子どもたちのネットワークを作ってプノンペンまで来て好きな制服が着ることが出来ない問題を訴えていた。

〇子どもの参画
・政府の役人と当事者の子どもたちが同じ席について対話をする機会をカンボジアの NGO が良く行っている。しかし、学校では小中学校では子どもの参画についてほとんど行われていない現状。国からの働き方は少ない。

〇シングルマザー
・離婚してシングルマザーになるケースが多い。日本と違って家族の絆がとても強い。自分が離婚してしまっても、親元に帰れば自分の親や兄弟姉妹が守ってくれるため、孤立することは少ない。
・プノンペンの郊外にいる極貧家庭のお話
おばあさんは自分の娘夫婦ともう一人の娘の子ども二人（両親はもういない）と住んでいて面倒を見ているが、おばあさんには職がないため、縫製工場で働いている娘と日雇い労働をしているその夫が全員分の生活を支えている。夫がいるこどもは学校に通えているが、もう一人の娘の子ども 2 人は学校に行けていない。それは学校教育が無料であっても、その二人分の制服代などまで支払うことが出来ないためである。
・カンボジアにはそういった孤児を預ける施設はあっても、そこに預けるのは恥ずかしいことだとされているため、できるだけ家族で面倒を見ようとする。その点でシングルマザーに対するサポートの仕方は違う。
・日本と違ってカンボジアには生活保護のような支援はないため行政は頼れない。
・カンボジアは離婚すれば女性に非があるのではないかと思われる差別的な社会。

・シングルマザーより独身や結婚して子供を産めない女性に対しての差別が強い。
・離婚して別の男性と再婚することはみだらな女性だと思われる。

〇ヤングケアラー・児童労働
・カンボジアはASEANの中でも圧倒的に高校卒業率が低く子どもの25%程度となっている。カンボジアの学校では落第・飛び級は普通に起こることで、落第は1年生と4年生で多く見られる。1年生はえんぴつを持ったことのないような子がいきなり勉強を始めるため、ついていけず落第する子が多い。4年生では学習内容が難しくなり、何回か落ちてしまうが、そこでやる気をなくしてしまうため、10歳くらいで学校をやめる子が多い。
・小学校から頑張って中学校・高校に上がってもやめてしまう子が出てくる。理由は男女差があり、男子は勉強についていけず働きたいといって学校辞める子が多いが、女子は貧しい家計を助ける母をみて学校をやめて家の手伝いをした方がいいと思って自分から辞める子が多い。
・ここ5年の統計で女子の就学率は右肩上がりに対して、男子は0.1%しか上がっていない現状がある。
・学校教育のなかで男の子のほうが基本的に受け身で余りは発言もしないが、女の子は元気で成績も良く、保護者もこれをなんとか変えることができないか訴えている現状がある。
・しかし理数科をみてみると、全体の進学率は女子の方が高くてもIT系・理工学部・法学部に進むのは圧倒的に男子が多く、女子はビジネスや教員などのほうに進むことが多い。

・親の介護をするために学校をやめなくてはいけない事例はあまり聞いたことがないが、親の収入だけでは足りないため、働く子はたくさんいる。
・例として、プルサット村では親がみんなタイに出稼ぎに行っているために、その村には子どもたちしかいなかった。中には祖父母と暮らしている子もいるが収入はないため、親からの仕送りが止まると学校行くどころか食べることもできなくなる。そうなると子どもたちはレンガ工場で働く。
・児童労働は減っていると思うが、統計がないため確実なことは言えない。
・カンボジアにはセイラーというこしょうのブランドがあり、そこでは児童労働が行われているが調査で行っても入れてもらえない。
・カンボジアはILOの条約に批准していて、国家条約も第2フェーズに入っているところ。児童労働については２１の決められていることがあり、その中に3－５mより高い場所で作業させてはいけないことが定められている。
・しかし、こしょう農園ではそれくらいの高さの場所に脚立で登らせて作業させている。
・また、家族全員でこしょう農園で働いている家庭もある。実際に子どもたちが炎天下の中で親と同じペースで作業できず休んでいると、親が子どもに働けと叩いていたことがあった。
・親が児童労働をさせているケースがある。
・また、建築現場で働いている親は家に子どもたちを置いておけないため一緒に連れていくが、子どもたちはそこにいてもやることがないため、親の仕事を手伝う。

〇子どもの性的搾取

・性的搾取・性的虐待の問題はなかなか表面化するものではないため、実際どれくらいあるかはわからない
・明らかになっているのは、今までは身近にいる人が小さい子どもたちをだまして性的搾取をするケースが圧倒的に多かったが、この 5 年くらいの間でオンラインでの性的搾取に移行していった。
・カンボジアでは貧困家庭に住む子は家に置かずに寺院に預けてお坊さんになってもらうことは普通。しかし寺院での男の子に対する性的搾取は長年問題になっており、誰もメスを入れることが出来ない状況。
・オンライン性的搾取の大体のパターンは、オンライン上で仲良くなった子に性器や裸の写真を撮らせて、そこからブラックメールをし始める。
・サイバー法が整っていないため、どのように処罰するのかは法律として定められていない。しかし、1 - 2 年前に子どもたちをサイバー犯罪から守る政策が始まり、インターネット上で子どもたちを騙すことは犯罪であるという認識を広めようとしている。
・カンボジアの縫製工場では月に 2 回の給与がある。多くの工場では現金支給だが、大きい工場の半数はケータイアプリで支払っている。
・女工さんは高等教育を受けていないため、お金の管理がちゃんとできず、すぐ使ってしまうことが多い。
・また、騙されることも多く、給料日前日でお金ないところを狙って、サラ金業者がメールを送る。これに手を出す女の子が後を絶たない。返せなくなると、サラ金業者はその子の勤務情報を全部把握しているため、それを利用して裸の写真を要求し、脅迫をする。
・大人も子供もデジタルリテラシーがないため、インターネットの正しい使い方を知らない、フィルタリングもないから Facebook を利用していてもポルノがながれてくるという恐ろしいことが起きている。
・政府は反政府活動だけを規制しており、ポルノに関することはスルーされてしまう。

3. まとめ

私たちのゼミ生は幅広いことを研究しているが、それに対して多くの現状を教えていただいたことでよりカンボジアのことを知ることが出来た。特に印象に残ったのは児童労働の中にあったプルサット

村についてだ。セントラルでは両親が抱えている大きな借金の返済を手助けするために子どもたちが一緒に働くというのを聞いたが、今回のレクチャーで親からの仕送りが止まると食べることもできないためレンガ工場で働くということを知った。生活ができないために学校にも行けず、子どもでも働かなくてはいけないのは悲しいことであり、レンガ工場で働くことしか知らずに大きくなるのはもったいないと感じた。その村では子どもたちか年老いた祖父母しかいなかったと聞いたが、ＮＧＯ団体などが協力して食堂などの食べる場所を提供することはできないかと考えた。仕送りが止まるとレンガ工場で働くことしか選択肢が残されないことをなくすために、学習機会を与える活動がその村にも出来れば文字の読み書きもでき、将来の選択の幅も広がるのではないかと考えた。

中川美さ集合

香須んと写真

Learning is Fun の中村健司さん　ワークショップ　報告

20FL626　　多田有香

活動日：1 回目　2 月 17 日
　　2 回目　2 月 22 日

1.　中村健司さんについて
現在行っている活動として、日本の高校生、大学生に探求学習のプログラムを提供、国内外の日本企業向けに、仕事に学びを組み込むプログラム「Learning by Working」を提供、カンボジアの僻地若手校長への基礎実務力、読解力のトレーニング、カンボジアの教職課程向けにアクティブラーニングの読書演習科目を開発。タイでチュラロンコーン大学の教授との共同出版にむけ執筆中。

2.　活動内容
スバイリエン、プノンペンでそれぞれ 1 回ずつワークショップを行った。

○1 回目
・2 分間トーク
2 人 1 組で話す側と聞く側に分かれてカンボジアに来て学んだこと、感じたこと、思ったことなどを話した。

・書き出し
10 分かけて自分が研究しているテーマについて紙に感じたこと・学んだことなどを思いつく限り書き出した

・ディスカッション
書き出したものを発表し、またそれに対してどのようにすればもっと良い回答を得られるか、情報収集できるかということをみんなで意見を出し合い、アドバイスをし合った。

○2 回目
・3 分間トーク
お互いにこれまでの活動を通して感じたこと、学んだこと、成長したと感じる部分などを 3 分間話し合った。

・書き出し
話すだけでなく 40 分かけて紙に感じたこと・学んだこと・成長した部分を思いつく限り書き出した

・ディスカッション
書いていく中で感じたことをみんなにシェアした
3.　まとめ

皆が時間を忘れるくらい終始集中していた。1回目でどのように質問すれば、どのようなアプローチをすれば相手が答えやすいのか、自分が求めている答えが返ってくるのか学んだ。みんなで一人一人の対策について話し合うことができた。また、聞く相手も親なのか子どもなのかといったことも確認することができた。おとなが子どもの意見を聞いている、子どもの意見を尊重していると言ってもそれが本当なのかはわからない。子ども自身に聞かなければならない。それらのことについて頭に入れながら、それ以降の活動を行なった。研究内容についても自分たちが現状どこまで知っていてどのように研究を進めていきたいかについても再確認することができた。また1回目では書き出しが時間内に手が止まるほどだったが、2回目では終わりと言われるまで、皆書き出し続けていた。カンボジアに来てさまざまな心情の変化や考えることがあった。そのことが目に見えてわかるワークショップであった。

2回目ワークショップの様子

ワークショップ後 健司さんと集合写真

第２部

フィールドワーク考察

20fl501　　新井達也

１．聞いたこと・考えたこと

最初に小学校に行って先生たちとお話をさせて頂いて４つの権利の詳しくどのような内容をやっているのか、守られているのかを知る事ができた。

授業見学では教科書に子どもの権利について載っていたことに驚いた。ただ、小学校４年生か

ら学ぶという事で逆にそれまでは権利を持っている事や使える事を知らない人が多くなってしまうと実際に何かあった時には手遅れだと考える。日本では子どもの権利についての教科書を見た事がないのでその面では日本は遅れていると思う。授業の中で子どもたちが子どもの権利についての質問に対して答えられていたので日頃から行われている事が分かった。日本でも小学生に聞いたら誰でも答えられるようになれば少しでも不登校の子や自分に対しての劣等感がなくなり、生きやすい世の中になると考える。

ピアエデュケーターの少年の家に訪問した際、父母は学校へ行っていないから大学４年まで行ってほしいとの事でした。日本では大学まで行く人が多いが父と母の思いを背負って大学に行っている人は少ないと思うので私は大学に行かしていただいている事、勉学に集中出来ることに改めて感謝していきたい。自転車がなかったからあまり学校に行けず勉強についていくのが大変だったと言っていたが中学でちゃんと教えてくれる人がいないとの事で教育の質がまだまだ高いとはいえないではないのかと感じた。

フレンズに行った際にミーティングで二つの柱があると聞いた。一つは子どもたちの命を守ること。二つ目は子どもたちのより良い未来を作ること。この二つを真剣に向き合っていると感じた。その中で印象に残ったお話は物乞いしている子どもにお金や食べ物をあげてはいけないことです。子どものころは可哀想だからなどといった理由である程度もらえるかもしもれないが、それに頼ってしまい大人になってからも物乞いをしていても、もらえなくなってしまい子どもの将来をつぶしてしまっていることを知っておくべきだった。

２．研究テーマと今回の収穫

私は『ヤングケアラー』について研究している。スバイリエン州のプラサー小学校では家でどのようなお手伝いをしているか約 70 人の子どもに聞いた。皿洗い、掃除、ご飯を炊く、兄弟の世話そして牛の世話が挙げられた。日本に比べてペットの世話の負担が大きいと考える。お金をもらってお手伝いしている人はいない。３年前に甲斐田教授が尋ねた際にはお金をもらって手伝う子どもが数名いたという。この数年で少しずつ良くなっていると考える。カンボジア女性救済センター（以下ＣＣＷＣ）では中学校で働く子どもがいたり、児童労働があったが今はどうか質問した。以前はベトナムに行って物乞いをする子どもが多かった。なかには赤ちゃんを抱っこして物乞いをしていたという答えだった。中学を辞めて働く人は一年に２～３人いる。中学校を卒業する割合は 70%残りの 30%は縫製工場で働いていてこれらの子どもは進級試験に不合格になった

ひとである。これを聞いて進級試験に合格できなのは生徒ではなく学校側に問題があると考える。

３．まとめ

今回のフィールドワークで私が思っていたカンボジアとは大きく違い発展していた。ただその中でも課題はまだまだある。今回３つの地域に行ってそれぞれの状況や雰囲気を身をもって感じた。日本と比べた時に日本では当たり前に学校に行っているがカンボジアでは当たり前ではないことを忘れない。田舎と都会では別の世界に感じるほど違った。交通量、建物、店の数、

着ている服、道など。私はカンボジアが少しでもより良い方向に向かっていることが分かった。しかし、世界にはまだまだ発展途上の国がある、それらの国のお手本となるような国になることを望むとともに協力していく。

中村健司さんのワークショップを通して学んだことや成長したことなど

最初にバスの中で行ったワークの中にベトナムに着いてかカンボジアに向かう道中で疑問に思ったことを発表する機会があった。各々、外の背景などを見て疑問を持っていた。その中で日本人は今まで受けた教育上、答えを出そう、知ろうとして考える力が乏しくなっているというお話を聞いて強く共感した。小さい頃は、親になんでと質問していたが年を重ねるうちに経験や固定観念から疑問に持つことが少なくなっていると実感した。特に疑問の持ち方では『何故』が無意識的に多くなってしまった。５W1H の質問を意識的にすることで違った視点から物事をとらえることができた。また、他の人の疑問を聞くことで自分自身が気づかなかった疑問を持てることができた。

もうひとつは質問の質を上げることができた。初日にも学校や施設で通訳を介して私たちが研究しているテーマについて質問をした。しかし、通訳の方が私たちが研究していることに対して理解が浅いものに関しては聞きたかった回答が返ってこずにそこのやり取りで時間をかけてしまったことが反省点。質問の質を上げるためにその日に話し合いをした。最初は二人一組のペアになりその日あった出来事を報告した。その後全体で感想共有をし、それぞれの反省点や気になったことに対して皆が質問やアドバイスをして次の日から改善していった。その中でも通訳の方に事前に自分の研究テーマについて説明して理解してもらい質問を打ち合わせしたことでそれ以降スムーズに進んだ。質問の内容もアバウトではなく具体的に答えやすいように質問をするように心がけた。また、健司さんと今回のフィールドワークで４つの約束をした。１つは『決めつけないこと』２つ目は『ためらわないこと』３つ目は『楽しむこと』４つ目は『助け合うこと』これらは私たちのフィールドワークをより良いモノにしてくれた。例えば決めつけないという観点でいえば私たちが固定観念に囚われていたら子どもたちへの質問も幅が狭くなり子どもたちなどの現地の人が経験してきた貴重な出来事や考え方を引き出せなくなってしまうと感じた。実例として私たちがプノンペンのピザ屋さんで食事をしていた時物乞いをしている少女が来た。私は彼女が学校へ行っていないのではないかと勘違いしていた。しかし、甲斐田教授はその子に「学校へ行ってるの？」や「何人家族？」などの質問をしていました。そこから少しではありますが彼女の事を知れました。これこそ決めつけなかったからこそ知れた事だと思った。

20FL518　大熊愛

1. 聞いたこと・考えたこと

今回のフィールドワークで訪れた施設や団体、経験した全てのことが初めてばかりで毎日が新しい学びの連続だったが、特に印象に残っている訪問先はセントラルである。この団体は法的支援やその他の適切な手段を通じて、カンボジアの労働者に、労働と人権に関する透明性と責任のあるガバナンスを要求する権限を与えられるように支援活動をしている。はじめは事務所に行き、搾取されている労働者の保護や労働者の能力を高めるサポートについてなどのお話を聞いたあと、実際にレンガ工場の内部を見せていただいた。しかし、外国人である私たちが大人数でも訪問できたのは運良くオーナーがいない日であったからだった。レンガ工場の敷地に足を踏み入れるとそこに住んでいる人々は見慣れないものを見るかのように私たちを見ており、少し緊張感が漂っているように感じた。しかし、さらに進んでいくと子どもたちが駆け寄ってきてくれ、そこから緊張が解けた。地面にはレンガの破片や空き缶の一部などが落ちており、その上を子どもたちは裸足で走り回っていた。地面の砂はとても細かく歩くだけで砂埃が舞うような状態であり、身長が小さい子どもたちにとって有害となるのではないかと感じた。そして、レンガが保管されている窯のようなつくりをしたものは高さが 3 から 4 メートルあったがその上を子どもたちは走り回り、レンガを地面に強く打ち付けて遊び、ショベルカーに上って遊んでいた。公園などではなく危険な場所で当たり前かのように遊んでいる子どもたちを見て、私は、教育を受ける機会を与えられず工場や建設現場で働くことしか知らずに成長していくのは、子どもたちの将来の幅を狭めているのではないかと感じた。この状況を少しでも変えるために子どもの教育を専門として扱う NPO に力を借り、週 1 回レンガ工場へ訪れ、両親が働いている間に本の読み聞かせを行うことにより少しずつ語彙を増やし国語のスキルを身に付けてもらうことができるのではないか。しかし、このような活動をする NPO の数が足りていないため、長期ボランティアを募集するなどの対策を考えていく必要があるのではないか。

2. 研究テーマと今回の収穫

私の研究テーマは「児童労働」であるが、今回のフィールドワークを通じて収穫できたことは、現在も児童労働は農村地域を中心に都市部でも行われていることである。児童労働に関する論文をこれまで読んできたが、児童労働は年々改善されてきていると述べられていた。しかし、中川かすみさんによれば児童労働は無くなっているのでなく、子どもたちが働いていることが隠されているためその事実が確認することができず、データに含まれていないということだった。実例として、アシックスの工場が崩壊しその中に子どもが含まれていたことから児童労働が発覚したということがあった。このような事故を未然に防ぐためにも児童労働を専門として扱うＮＰＯや縫製工場を所有している親会社から社員を派遣して定期的な工場のモニタリングを行う必要がある。しかし、中川さんによれば視察を目的として訪問しても中に入れてもらえなかったことがあるとおっしゃっていた。そのため、法的な対策をとり工場長の許可がなくても中へ入り児童労働が無いか確認できるシステムを導入する必要があると考える。

3. まとめ

今回のフィールドワークに参加して、生まれる場所が異なるだけで生活スタイルや文化、言語など全てが変わってくることを身をもって知った。日本では、生活していくのに最低限な教育や暮らす場所、食べ物、服などがある。子どもは勉学に励み、おとなはお金を得るために働く環境がある。私たち日本人にとってはそれが当たり前の環境かもしれない。しかし、カンボジアでは都市部と農村部で大きな格差があり、特に農村部では子どもが両親を支えるという規範を持つ人が多かった。そしてこの規範があることにより、貧困に苦しんでいても子どもから教育の機会を奪い働かせる、両親の負担を減らすために早く結婚させるなどの様々な問題につながるのではないか。この状況を変えるためにも、まずは子どもの権利の内容を知ってもらい、それをどのように行使していくかという知識を身に付かせてもらわなければいけない。しかし、無理やり考え方を押し付けるのはお互いにとってマイナスでしかないため相互理解をはかりながら進めていく必要があると考える。このフィールドワークはとても濃い学びの場であったため、これからの生活や卒業研究に活かしていきたい。

中村健司さんのワークショップを通して学んだことや成長したことなど

健司さんのワークショップを通じて学んだこと・成長したことは３つある。まず１つ目は、真実は実際に現地へ行き自分の目で確かめなければわからないことを学んだ。カンボジアというと教育の場が十分に提供されておらず、性的搾取や児童労働などの問題がまだまだ起こっているという印象があった。インターネットで調べてみると法の強化などにより改善傾向にあるということだった。実際に、コミューン評議会で村長さんや役員の方のお話を聞いてみると、現在は村の人々の子どもに対する意識が改革され、物乞いや児童労働はないと断言していた。しかし、実際にその場で話を聞いていたが、こちらの質問とはずれた回答をし続けており、曖昧な回答をしていたことから信憑性が低いと感じた。そして、実際に村の人々との交流や家庭訪問、中川かすみさんとのお話を通じて、最初に挙げていた問題は解決されたのではなく隠蔽されているだけで表向きには改善されているように見えるが実際はまだ行われているということだった、このように、現地の方や現地で調査活動をしている方たちと話をし、自分の目で見ることで初めてわかることがあるということを学んだ。2 つ目は、私はポジティブな感情を持ちやすいことがわかった。ワークショップで紙に書きだした学びや気づきの中で感情に焦点を当ててみると「嬉しかった」、「面白かった」、「好き」、「わくわく」などといった肯定的な言葉が多かった。例えば、「嬉しかった」という感情は小学校に訪問した際、子どもたちが話しかけてくれたときに感じた。私は普段子どもに話しかけられる経験があまりなく、距離の縮め方がよくわからなかった。しかし、カンボジアの子どもたちは人懐っこく、外国人であり言葉もうまく通じない私たちに沢山話しかけてくれ、手を引いて一緒に遊んでくれた。この時に私は、子どもたちに何か特別なことをしてあげられる訳ではないけど、子どもたちは私を必要としてくれて興味を持ってくれていることに対して嬉しいと感じていることに気が付いた。3 つ目は、日頃から考える力が伸びたことである。私は普段、何か体験したことに対して「なんでだろう？」と考えるよりもそのまま「そういうものか」と受け入れることが多かった。しかし、1

回目の健司さんのワークショップに参加してから訪問先や移動中の車窓から見える光景から疑問点を探したり、他のものと比較してみたり、常に学びのアンテナが立っている状態となっていた。例として、カンボジアの村では裸足で歩いている子どもやおとながおり、家の壁が無いもしくは壊れている状態だった。しかし、学校や家庭訪問へ行くと出会う現地の方々が笑顔で私たちを迎え入れてくれ、優しさや心の温かさを感じた。それに対して日本は衣食住が揃っており、教育の場もあるのにどこか疲れたような表情や余裕のない人が多い印象がある。この2つを比較したとき、家族の位置づけの違いが大きく影響しているのではないかと考えた。カンボジアにおいて家族とは日本では比べ物にならない程位置付けが高くとても大切にされているということだった。つまり、たとえ衣食住のどれかが欠けていたり不十分であったとしても家族さえいれば幸せといった考え方がカンボジアで暮らす人々の生活していくうえでのモチベーションとなっているのではないか。健司さんはワークショップを行う中で大切にすべき4つのルールとして「楽しむこと」、「決めつけないこと」、「助け合うこと」、「ためらわないこと」を挙げていた。このルールがあったからこそ、私たちは物事を難しく捉えずリラックスして話すことができた。これにより、些細なことでも自信をもって意見を他者に伝えることができた。このワークショップを通じてカンボジアでの経験を振り返ったことにより学びを深められたことに加えて、それぞれが自分と向き合う時間にもなったと感じる。そして健司さんの4つのルールは学びに限らずこれから生きていくうえで大切なことだと思うため、日頃から意識して過ごしていきたい。加えて、このワークショップで身に付けた力を卒業研究にもつなげていきたい。

20FL604 大島万奈

1. 聞いたこと・考えたこと

フィールドワークを通して、教育を受けることの大切さを身に染みて感じた。カンボジアに行く前までも教育は大切であると頭では分かっていたが、実際にカンボジアに来てみて、改めて、教育を受けることがどれほど重要であるかを実感した。農村部と都市部といった地域格差や経済格差などによって子どもたちが受けている教育の質に大きく違いがあることが分かった。同じカンボジア内であり、同じ年代、年齢の子どもであるにも関わらず、教育格差が起きてしまうことは大きな問題であると感じた。フィールドワークを通して、カンボジアの学校では公立の先生が午前中は普通の授業を、午後にはお金をもらって塾を開いているということを学んだ。先生の中には、お金をもらって行う塾ではちゃんと教えるが、通常の午前に行われる授業ではちゃんと教えてくれない先生もいると知り、悲しくなったと同時にそのような先生の気持ちも分からなくないと思った。しかしこのような先生がいることは大きな問題であると考えた。なぜなら、カンボジアには落第制度があり、テストで合格しなければならない。午後に開かれる塾に通える子と通えない子で、学習能力に差が出てしまうと思ったし、テストにも影響が出てしまうのではないかと考えた。また、学年が上がり科目数も増えてくると塾のお金を出せなくなってしまうことや、そもそも親が教育を受けてこなかった場合、教育の大切さを理解していないこともあり塾に通わせる必要がないと考えている親もいると聞き、子どもたちが置かれている家庭や状況、住んでいるところなどで教育に格差が生まれてしまうのは、おかしいと思ったし、この現状は変わっていかなくてはいけないと感じた。質の良い教育を受けてきたかどうかで、子どもたちの将来までもが大きく左右されてしまうと感じたし、またその子どもがおとなになり子どもが生まれてきても同じ状況を繰り返してしまうと感じた。子どもたちが将来なりたい職業を自由に選択でき、周りの環境に邪魔されず夢に向かって生きていくことができるようになって欲しいと心から思った。

今回のフィールドワークを通して一番心に残ったことは、レンガ工場を見学したことである。レンガ工場と同じ敷地内にレンガ工場で働いている女性やその子どもたちが住む家があり、実際に住んでいる場所を見たが、それは家と言えるようなものではないと感じた。また、そこに住む子どもたちも学校に通わずにレンガ工場で働いている。子どもたちはレンガ工場内の景色しか知らないと思ったし、綺麗とは言えない環境で働き暮らしていた。レンガ工場で特に印象に残っていることは、レンガ工場にいた子どもたちが笑顔いっぱいで楽しそうであったことである。多くの人がこの子どもたちが置かれている環境を見たら、かわいそうだと思ってしまうと感じた。しかし、子どもたちの表情はそのようなことは感じさせないくらい明るくて、私たちを出迎えてくれたり、手を繋いでくれたことは深く心に残ったし、いろいろなことを考えさせられた。この子たちは、実際にはどのようなことを考えていて、どのようなことを思っているのかを知りたいと感じた。

2. 研究テーマと今回の収穫

私の研究テーマは LGBTQ についてであるが、フィールドワークを通してカンボジアにおける LGBTQ について多く学ぶことができた。カンボジアで起きている LGBTQ の問題は日本で起

きているLGBTQの問題と類似している点が多いと気付いた。それはLGBTQ当事者の子どもは、学校でいじめやからかいに遭っているということである。「おかま」と言われからかわれたり、「お前とは関わりたくない」などと言われてしまうなど悲しい目に遭っている子が存在するということが分かった。また、日本のLGBTQ当事者の子ども若者たちのなかには、自傷行為や自殺念慮、実際に自殺しまう人もいるが、カンボジアでも同じことが起きているということが分かった。LGBTQ当事者の子どもたちの親がLGBTQである自分の子どもを受け入れられないといったケースもあり、カンボジアでは親がその子どもを家に閉じ込めて周りの人に見られないようにするといった話を聞き、その子どもはどれだけ辛く苦しい思いをしているのかと考えると、胸が痛くなった。また、生まれた時に割り当てられた性が男性のLGBTQ当事者よりも、生まれた時に割り当てられた性が女性のLGBTQ当事者の方に対しての方が親や周りからのあたりが強かったり、受け入れられないケースが多く、暴力を受けることも多いと学んだ。

3. まとめ

カンボジアフィールドワークに参加して、多くの学びだったり、感じたことや考えたことを今後も大切にしていきたいと感じた。すべての経験がとても貴重な体験で、今回カンボジアに行けて良かったと心から思った。また、カンボジアで出会った人たちの多くがとても優しくて笑顔が素敵で、心が温かくなることも多かったし、この出会いに感謝したいと思った。カンボジアでの経験は私の心をより豊かにしたし、忘れずに生きていきたいと思う。そして、カンボジアという国が大好きになったし、いつかもう一度行きたい。

健司さんのワークショップを通して学んだことや成長したことなど

健司さんのワークショップは合計で3回行ったが、3回目のときは1回目と比べて自分でも分かるほど、明らかに成長していると感じた。健司さんのワークショップはフィールドワークを通して自分がどのようなことを学び、どのようなことを感じて、考えていたのかを紙に書いたり、ゼミ生の子と話すことで自分の頭の中を整理することができ、振り返ってみると自分がどこに興味を持っていて、どんなことについてよく考えているのかを知れて自分のためになるワークショップであると感じた。また、自分の考えや思ったことをゼミのみんなと共有することで、新しい視点を知れたり、また違った考え方や価値観を知ることができるため、どんどん自分の視野が広がっていくのが分かった。さらに、自分の考えを共有し合うことで、自分自身のことも知れたり、実際に共有した際、健司さんに「探求心」があるのかなと言ってくれて、他者から見て自分がどういう人間に見えているのかを知れてとても興味深いと思った。また、自分ではそうだと思っていなくても他の人から見ると、違ったように見えていて自分自身の理解にもつながると感じたので、このワークを今後も続けていきたいと思った。このワークは今回のカンボジアについてだけでなく、いろいろな場面でできるため、今後の人生にも活かしていきたいと思った。現在行っている就活においても自己分析であったり、企業研究などにも役立てることができると思った。健司さんのワークショップでは、言語や文化の違う訪問先でどのように質問することで自分が求めている回答を得られるかということについても学んだ。このワークを行う前と後では、質問方法を工夫することで、相手にも分かりやすく、そして抽象的な質問を避けることで、より自分が欲しい回答を得られたため、自分の成長を感じることができた。また、少し求めている回答とは違うなと思った際には、同じワークを受けた他のゼミ生が追加で質問してくれるなどして、助けてくれることも増え嬉しかったと同時に周りのゼミ生の成長も一緒に感じることができた。これは、健司さんのワークで一番最初に学んだルールである、「決めつけない」、「助け合う」、「楽しむ」、「ためらわない」の4つのルールが活かされていると感じた。この4つのルールはワークを行うときだけでなく、人生という大きなテーマの中でもとても大切で、良いルールであると思ったし、カンボジアフィールドワークを行っていく中でも、様々な場面でこのルールが大事であると気付かされた。特にこの4つのルールの中の「決めつけない」は他国のことを学ぶ上で非常に大切であると感じた。言語も異なれば、文化も異なり、成長した過程も異なるなかで、日本で生まれ育った私の常識がカンボジアにとっての常識ではないし、自分はこうだから、きっとここでもこうだろうと考え決めつけてしまうことは、非常に怖いことであると学んだ。決めつけないからこそ見えてくる視点があったり、日本だとこうだけど、カンボジアではどうなんだろうなど、次々新しい疑問が生まれて、楽しむことができた。決めつけてしまうことはつい無意識にやってしまうことが多いが、意識的に「決めつけない」ようにし、自分の人生をもっと豊かにしていきたいと思った。

20FL626 多田有香

1. 聞いたこと・考えたこと

私が特に印象に残ったのは Friends とレンガ工場の訪問と中川かすみ様のお話である。 まず Friends という NGO 法人に訪問した時にボランティアの本当の意義について考えさせられた。ボランティアはこちらが良いと思ったり役に立つと思って活動してもそれは本当に対象者にとって良いこととは限らないということを聞いた。直接聞くことが重要である。お金がない人は食事やお金が欲しいのではなく、仕事が欲しいという例を挙げて説明してくれた。確かに私たちが欲しいだろうと思っていても、それは本人が欲しいものかはわからない。だからこそ話し合って何を必要としているのかどのような支援をして欲しいのかボランティアを行う上で重要であると考えた。また、お金や食べ物の物乞いをしている子どもたちにそれらをあげてしまうと親に取られたり、観光客に物乞いをすればお金がもらえてしまうと思ってしまったりしてしまい、貧困の悪い循環を作ってしまうということも学んだ。学校の教師として訪問する際も、短い時間であると子どもの愛着が湧いてしまい、悲しいという思いをしてしまうと聞いた。持続的に自立して生活できるようにすることが重要であると考えた。

次にレンガ工場では、都市部に位置しているが、地方よりも貧困を感じた。周りに建物が多く建てられているところに一つ道を外すとレンガ工場があった。そこでは子どもたちが砂埃の中で生活していたり、レンガを投げて遊んだりと危険だと感じた。しかしその子どもたちは笑顔で私たちを迎えてくれ、別れ際には終始手を振り続けてくれた。弟の世話をしている女の子を間近で見て、日本の世話を見るという状況とは違うと感じた。小さい体で弟をずっと抱っこしていた。その姿は逞しく、母のようだった。自転車に乗ってこちらを見ていた子も最後にトントンとしてきてハイタッチを求めてくれて胸が締め付けられた。とても可愛くてピュアだと思った。またヤンチャで牙のようなおもちゃを口に入れて見せてきたり、レンガを投げて遊んでいたりした子も最後に握手を求めてきてくれたり写真も一緒に撮ってくれたりととても無邪気で可愛かった。この子どもたちが学校に行くことができたら、たくさんのことに興味を持ち、すごく発言すると思った。もっと教育を受けることができて子どもの権利が守られれば自分の人生の可能性を広げ、社会を引っ張るようなおとなになると考えた。

そして、中川さんからお話では一人一人のテーマについて丁寧に答えていただいた。また、長年住んでいたことから日本人から見たカンボジアの生活について話してくださり、興味深かった。私の研究テーマの性的搾取についてもお話ししていただいた。20 歳の男性が妹をレイプしていることもあり、身近な人が騙すことも少なくないことを知った。またオンラインに移行してきている。4, 50 歳の男の人が年齢を騙しオンラインによって性的搾取することも多くなってきている。まず友達になり、性器や裸の写真を撮らせて送らせる。そしてそれをばらまかれたくなかったら、お金をくれと脅すことがある。オンラインのサイバー犯罪から守るサイバー法がまだない。行政が作ってインターネット上でよくないことだと示すべきである。しかし、その実態は調査しづらい。また、子どもはお金がないことをいいことに、お金がないこどもに手を出す。それに子どもも乗ってしまう。どのような角度でどう撮れという指示も送られてくる。しかし調査がないからわからないのが現状であり、難しい問題である。この話を聞いて、正しいデータを取得することは難しいと痛感した。また、オンラインで行われているからこそより探しづらくなっていると思

った。これらを防ぐためには、親や村などのコミュニティが子どもたちにそのようなことをさせられないように見守らなければならい。そして、貧困を改善させなければならないと考える。お金がないとそのようなお金の稼ぎ方もあると思ってしまい、それが日常になってしまう。そのことがどれだけわいせつなことなのか、子どもの成長を妨げているのかということを子どももおとなも確認しなければならいと考えた。

2. 研究テーマと今回の収穫

私は性的搾取を研究テーマとしている。カンボジアに行った当初はやはりこのテーマは難しいと感じた。データもなく、きちんと情報収集することもできない。また聞きづらいということもあり、本当に収集したデータが正しいのかもわからない。目に見えないため起こっていることが不明である。しかし、だからこそ研究を深めていき、現状についてより知りたいと思うことができた。また、女性か子どもどちらを対象とするか迷っていたが元気でかわいい子どもたちを見て、子どもについて研究を進めていきたいと思った。オンラインでの性的搾取についても興味を持った。これから東南アジアの性的搾取の状況とオンライン性的搾取についても調べていきたいと思う。

3. まとめ

会う人会う人笑顔で挨拶をしてくれ、出迎えてくれた。その笑顔を守りたい、子どもたちの未来を守りたいと思った。この純粋でかわいい子どもたちが勉強をする場があれば生活も良くなるし、経済にも影響を与えるようになると思った。訪問した学校では遊具を取り合いっこをするのではなく、譲り合って遊んでいた。その優しさと寛容さはカンボジアの子どもの特徴だと思った。また、日本では勉強はしなければならないものと教えられて育ち、中学校までは強制的に勉強させられる。しかし、カンボジアでは真逆であり学校に通っている子どもたちは少ない。また、勉強をしている子どもたちは意欲的に行なっている子どもたちである。日本のやらなければいけないということから嫌になったり、モチベーションが下がったりする。日本は勉強をする環境はあるが意欲がない子どもも多い。カンボジアでは環境が整っていないで勉強したい子どもが多い。どちらも良いところと改善するべきところがあると考えた。意欲を持ち続けられて勉強に励めることが良いと思った。そういう人々がもっと増えれば良いと考えた。そのために成功した人の体験談を聞いたり、本を読んで人の人生を学ぶことが重要だと学んだ。また、英語を話す人々に会って自分で勉強して英語を話せるようになった姿を見て自分も頑張らなければならないとモチベーションが上がった。カンボジアの母語はクメール語だが、英語を話せる人もいた。英語を話せればどこの国でも生きていけると痛感した。そのため、自らの口で自分の気持ちを伝えていきたいと思った。そして、ゼミ生との仲間の意識もより強いものとなった。学びと楽しみと共に分かち合い、乗り越えていくことができた。これからの学校生活、人生で視野が広がり、仲間の絆も深くなり、とても貴重な有意義な時間になった。

健司さんのワークショップを通して学んだことや成長したこと

○1 回目

バスの中で行ったワークショプでは疑問を持つことが重要であり、その疑問の仕方も学ぶことができた。疑問というと「なぜ」と頭にいつもついていると気付かされた。もっと誰がどのようにどこでなど 5W1H のように様々な疑問を持つことできると学んだ。またそれは子どもの時にはあってもおとなになるにつれて考えなくなるということを聞いて本当にそうであるなと感じた。決めつけてしまっていることがよくあると思った。2 日目の夜に行ったワークショップでは、まず自分が考えたこと、思ったことについて 3 分間話した。そうすることで自分が本当に何を考えているのか、何に対して興味が持ったのかわかって面白かった。はじめはそんなにずっと話していられるか不安だったが、話してみると意外と考えを深くしたり、他のことについて話すことができた。また話をする側と聞く側に分かれて行うことによって自分の思っていることを肯定されているように思ったし、とりあえず言ってみようという気持ちになれた。その後の書き出しでは、自分の研究について、カンボジアについてから感じたことについて書いた。自分がもやもやしていることを言葉にしてみることができて頭の整理ができた。意見を言ってアドバイスをもらう時間では、質問の聞き方についても学ぶことができた。子どもに質問するときは目線を同じ高さにしたり、自分で考えて試行錯誤してみたり、仮説し一旦聞いてみたりすることもスキルとして学んだ。おとなが子どもの意見を聞いている聞けていると言ってもそれは本当かどうかわからない。子ども自身に聞かなければならない。また、その年齢、性別によっても聞くこと、聞き方は違うと学んだ。私のテーマについて小学生に聞くことは難しいと思った。大学生に聞くことが良いと学んだ。聞きづらい内容であったらフォーマルとインフォーマルな質問を分けて考えてその状況によって質問を変えることも良いとアドバイスをいただいた。一歩下がったり、自己開示をおこなったりすることで、デリケートな質問についても聞くことが必要であり、本音を引き出すことが重要だと知った。みんなで意見を出す場面では全員が発言したため、仲間がそれぞれのテーマについてどのように考えているのかわかり、今後の研究についても互いにやりやすくなったのではないかと考える。自分が考えていない視点を持っている人にアドバイスをもらうことができてよかった。卒論に生かすことができると感じた。またこれからの情報収集でも生かすことができるのでみんなで一緒に頑張っていきたいと思った。

○2 回目

1 回目では 1 ページの半分も書くことができずに手が止まっていたが、2 回目では手をほとんど止めずに 3 枚書くことができた。書き出しでは 20 分間書いたと思っていたが、40 分も経っていた。自分がどれだけ考え、感じていたのか実感することができた。1 回目のワークショップで学んだ質問の仕方について実践し、答えを聞き出すことができたと思う。成長したこととして、書き出しでは、様々な方面から考えや感じたことを書き出すことができた。関わった人から連想させたり、行った場所から連想したり、研究テーマから連想したり、自分自身の変化や成長した部分を連想したりした。質問の仕方では、相手が理解しやすいように例を述べたり自分の仮説を述べたりして工夫した。また、抽象的に質問するのではなく、具体的に聞くことを意識した。「お

父さんは家事をおこなっていますか」と聞きたい時には、そのまま聞くのではなく、「今日の朝、ご飯を作ってくれたのは誰ですか」と聞いて現状を明確にできるように聞いた。そして、書き出して自分の思っていることを残すことが重要であると学んだ。私は忘れやすいし一度考えたことも忘れてしまうことがある。しかし、この書き出し作業を通じて、私はこれだけ日々考えているのか、考えられるのかと自信にもつながった。また、書き出しの際にも思うことが多かった時に何を書き出すか忘れてしまうことがあるが、この考えを忘れてしまうのは勿体無いと思った。そのため、就活やこれからの生活にも活用することができると思った。簡単でいいからとりあえず書き出してみるということが良いと理解した。このワークショップを通じて、自分に自信がついたし、質問の仕方や考え方が成長した。

20FL628 千明 隼也

1. 聞いたこと・学んだこと

カンボジアに入国した時、クメール語以外にも中国語で書かれた看板が多く立ち並んでいた。まず私はなぜカンボジアに中国語の看板があるのか、疑問を立てた。また道路は未舗装の所が多く、車のタイヤがパンクする程道が悪かった。ここから発展途上国の現状が分かると思う。タナオの小学校は農村部にあるため、道中のバスの車内は揺れるばかりだった。小学校に到着すると子どもたちが大勢で出迎えてくれた。授業を見学していたが、子どもたちの積極性は旺盛で、とにかく明るくて元気な子どもたちばかりだった。日本の小学生とは全く異る。日本は比較的静かであまり発言をしないイメージが多いと思う。カンボジアの子どもたちを見た瞬間、緊張していた心が一気に解された。子どもたちと遊び終わってみんなと別れの挨拶をした。子どもたちはバイクで通っている人がほとんどで驚いた。どうやら農村部では警察に見つからないため免許を持っていなくてもバイクを運転しても良いのである。家から学校まで距離があるという問題が関係するのだと思った。また子どもたちのほとんどは靴を履いていない子もいるため、徒歩で通学する人はとても危険だと思う。この理由からバイクや自転車に乗って通学している人もいるのかもしれない。

学校関連の問題について話すと他にも学校の教育方針について問題があると感じた。学校を訪問している最中に思ったことは、学校教員が少なすぎること、教室が少ない、教師はほぼ誰でもなれたりすることに衝撃を受けた。これは中川かすみさんが仰っていたことである。もし日本でこのような事が起きたら教育の崩壊と言えるだろう。カンボジアも同じことが言える。教員不足や施設の不備により子どもたちへの教育が不十分であると思う。カンボジアの教育省はこのような課題に真剣に取り組むべきだと思った。

2. 研究テーマと今回の収穫

私は学校の校則について研究をしている。近年日本では中学校や高校の校則が理不尽すぎると話題になっており、ニュースでも取り上げられている。このような生徒にとって意味の無い校則を「ブラック校則」と呼ぶ。カンボジアで直接現地の人とお話をする機会が多く、学校の校則について問いかけた。しかし、多くの人は特に深刻そうな顔ではなくそれに対して何とも思ってなさそうな感じを読み取ることができた。カンボジア人は命令に逆らうことは容易ではなく、その命令は絶対に従わなければならないのが当たり前だとピアエデュケーターの方が仰っていた。そのため日本のようなブラック校則などは私たちが訪れた地域の学校では存在しなかった。しかしプノンペンの学校ではこのような事例が起きた。生徒同士喧嘩をしていた時にある教師が止めに入った。すると、その発端を作った生徒は懲罰室に連れていかれたのである。その部屋には棒のようなものがあり、その生徒は恐らく体罰に使うものだと推測した。カンボジア国内全ての学校が厳しくなかったりというとそうではない。日本の学校で定められている校則はカンボジアの校則より鮮明に記載されている且つ理不尽な校則も含まれているのが現状だ。

3. まとめ

今回のフィールドワークを通じて日本とカンボジアの学校の校則の比較をすることができ、また取材した情報を卒論の素材として活用できると思った。また私の研究テーマ以外にも、縫製工場で働く子どもたちの現状を間近で見ることができ、とても良い経験になったと思った。カンボジア人は笑顔で優しい方々が多かった。最初カンボジアに行くとなった時は少々躊躇った部分はあるが、実際のところ躊躇う部分はあまり無かった。本当に行けてよかったと心から感謝している。

健司さんのワークショップを通じて

今回のカンボジアフィールドワークでは、引率の方として中村健司さんが 7 日目まで私たちに付き添ってくださった。また、そのフィールドワーク中、3 回に分けてワークショップも開いてくださった。そのワークショップには 3 つのルールがあり、「決めつけない」、「躊躇わない」、「助け合う」、そして「楽しむ」である。これらを心がけることによって、ものの見方が大分変わったと感じた。1 回目のワークショップでは、ベトナムからカンボジアへ向かっている最中のバスの車内だった。私はどんな目的のワークショップなのか当時理解していなかったが、ユニークでとても楽しいものだった。最初は、簡単な質問をしてみることから始まった。当たり前なことや気づいたことを質問文にする作業を行ない、一人一人口頭で質問していく。日本には無いことに関する質問では、「どうしてベトナム人はバイク乗りが多いのだろうか？」、普段の生活に関することでは、「色は何色あるのだろうか？」などのような質問を作りあっていた。その時私はおそらくカンボジアへ行ってそこで質問をたくさんするようにトレーニングをしているのだと思った。そのため質問を作っていてこの目的は何か気が付くことができた。このワークショップをする以前は質問を積極的にするのが苦手だったが、このワークショップのルールである「躊躇わない」のお陰で私を積極的に質問させてくれた。

2 回目のワークショップでは小学校を訪れた際の取材についての振り返りを行った。ペアになって 1 人 2 分間沈黙が起きないように話し続けていた。たくさん話すことがあるせいかとても短く感じた。最初は 3 分間話すことに対して少し長いと心の中では思っていたが、実際に話してみるとそうでもなかった。またカンボジアに来てみて日本とどのような違いがあったか、小学校を訪れて気づいたことなどをノートに書き出す時間があった。健司さんからは「なるべく多く書き出して！」と指示されたため書き出そうとしたが、10 分間で 4 つ程しか書くことができなかった。

しかし最後のワークショップの時では、2 回目と同様にペアを作って 1 人 2 分間話した。すると 2 回目よりも今回の方がより沈黙のない会話をすることができ、さらには 2 分ではなく 3 分間話していたのである。3 分たった気が全くせず驚いた。また、書き出しの時も 10 分間で今までの振り返りを箇条書きで書いていたが、2 回目よりも遥かに書き出している自分に衝撃を受けた。私は「どうしてこんなに書くことができたのだろう？」と疑問に思った。また時間も 10 分ではなく実際には約 20~30 分間書き続けていたそうだ。全く実感がなくとても短かった気がした。人間

は１つのことに集中すると本当に時間を忘れてしまうんだなと今回のワークショップで学ぶことが出来た。またゼミのみんなとの意見交換の時にもそれぞれの振り返りの感想や健司さんからのコメントを頂いて将来の為になったと感じた。またこのワークショップはカンボジアのフィールドワーク以外にも今後の人生のためにも役に立つと思った。

20FL717　橋本隼登

1. 聞いたこと・考えたこと

家庭内での役割がどうなっているかを色々な人に聞いた。CCWC では、女性で働く人が増え、男性は家事をするようになったと言っていた。縫製工場ができたことにより女性は手先が器用で男性よりも給料が高く、働く人が増えた。また、男性から女性への暴力は減ったと言っていたが、すぐ警察が来るからという理由でやめた人たちもいるらしい。ピアエデュケーターの男の子の母親は農業をしていて、父親は働きに行ったが体が弱く辞めてお手伝いを息子さんとしていた。さらに、大学生との交流で、ジェンダーについて大学で学んだと言っていた。小中高では学ばず、大学でも学ぶ人と学ばない人がいるらしい。そして、カンボジアでは政治的な話をすることが良くないとされていて、批判的な発言を SNS で投稿して逮捕された人もいる。私はこのことを知らなかった。現地で万智子先生から聞いて、カンボジアの人たちはとても温かい人たちが多くとても良い国だと思っていたが、この国にもこういった暗い部分があることを知った。また、カンボジアでも最初に行ったスバイリエン（村）の方では、目が合うだけでニコッと笑ってくれる人がほとんどでした。しかし、都会（プノンペン）の方では村の人たちほど目が合っても笑ってくれる人たちは少ないなと感じた。日本でも東京は人見知りの人たちが多く、田舎の方の人は人見知りする人が少ない印象があるのでそれと似ているなと感じた。何が人見知りにさせるのか気になった。

2. 研究テーマと今回の収穫

私の研究テーマはジェンダーである。今回のフィールドワークでの収穫としては、自分のテーマであるジェンダーとう言葉の意味や定義とは何なのかを改めて調べようと思えたことと、ジェンダーギャップ指数ランキング上位の国と日本との違いはどうなのかなど、これから論文を進めていくうえで何をすればよいかが分かったことだ。また、ジェンダーについて現地で調べていたら自分の通っていた高校がジェンダーを学ぶ授業があったこともネット上で掲載されていて、思い返せば総合という授業で私も学んでいたことを思い出した。そのため、自分がこのテーマに関心を持ったのもそこから来ているのかもしれないと思った。

3. まとめ

自分は海外に行くこと自体が初めて、かつカンボジアというあまり知らない国で、行く前は不安が多く、正直あまり行きたいという気持ちがなかった。それより前から行きたいと思っていたアメリカに行きたいと思っていた。しかし、カンボジアなんてこの機会を逃せば行くことはないし、普通じゃ体験できないことができると思い、行くことにした。そして、カンボジアに行って途中から本当に来てよかったなと心の底から思えた。そのため、少しでもしたくないことが今後あってもあまりない体験とかができそうであればしてみるのも良いなと思った。また、こういった海外などの未知の経験をすることは楽しく、学びや視野が広がるのでもっと海外に行ってみたいと思えた。さらに、カンボジアフィールドワークのおかげで、ゼミのみんなとの仲がより深まったし、万智子先生とも仲が良くなった。また、今回は、フィールドワークという形でカンボジ

アに行って、かつ万智子先生という方がいたおかげで、ラタナさん、ポーキーさん、健司さんなどの多くの方が携わってくれて自分たちはとても良い経験をさせてもらえたなと思います。とても感謝しなければならないなとも思います。

健司さんのワークショップを通して学んだこと・成長したことなど

ネガティブになるのは人間の機能的なものだからネガティブになったときは無理やりポジティブになろうとするのではなく、今自分はネガティブな状態だと客観的に見てこれは機能で仕方がないと思えばよいということ。また、健司さんはカンボジアにいるうえで４つのルール守るように言われた。それは、楽しむ、助け合う、決めつけない、ためらわない。これにより、少しためらってしまうことはあったが、いつもよりはためらわず色々質問でき、話せたと思う。また、それ以外はカンボジアだけでもなく日本に帰ってきても少し思い出して継続して行えている。しかし、助け合いは何人かがやるだけでなく、全員で助け合うことが大事だなと経験して感じている。今回のフィールドワークを通して他力本願だった自分も少しは変われたきがする。だが、他のゼミの人は自分よりも積極的な人ばかりなので少しずつでも良いから自分もさらに積極的に言動でなく行動したい。

そして、健司さんのワークショップでは、自分の考えていることなどをルーズリーフに書いて自分の考えを整理することができたし、2 回目の時のワークショップでは集中しすぎて気づいたら１時間くらい書いていた。それでも疲れていなくて、むしろ気持ちが良かった。帰ってきてからもやろうと思っているが、まだできていないのでたまにでもよいのでしていきたい。

20FL801 インペリアル ジュダーミカイア

1. 聞いたこと・考えたこと

私は自分が研究していること以外に、貧困層の子どもたちに興味がある。今回のフィールドワークでは、リアルな子どもたちの生活を間近で見ることが出来た。一番印象に残っていることはフレンズ、レンガ工場への訪問だ。

フレンズではトゥクトゥクツアーに参加した。そこでは旅行者が考えるべき 7 つのことを、市内をめぐりながらお話を聞いた。それに参加するまでに漠然と発展途上国の子どもたちを助けたいと考えたことがあった。SNS を見ていて発展途上国の学校に訪問して、そこで子どもたちに何かレクチャーをする投稿を見ることがあった。映っている子どもたちは楽しそうで良い活動をしているなと思っていたが、それが教育を妨げたり、抱っこしたりすることも子どもの愛着問題に繋がったりと、むしろ悪い影響及ぼすこともあると分かった。将来、発展途上国の子どもたちと関わる機会があれば、その子どもたちがどのような問題を抱えていて、どのような支援をすれば良い影響を与えることができるかしっかりと考えたい。また、発展途上国で苦しい生活を送っている人々の写真を撮って SNS にあげるのはその人々の生活をリスペクトしていないことになってしまうことも聞いた。自分が相手の立場になってみて、不愉快にならない接し方をする必要があると考えた。

フレンズ訪問後はプノンペン郊外にあるレンガ工場に訪問することが出来た。レンガ工場にはたくさんの子どもたちがいて、その子たちは学校にも行けずそのレンガ工場で親と一緒に働いていた。地面は砂埃が立ち、レンガの破片などがたくさん落ちていたのに、多くの子どもたちは靴を持っていないのか裸足で走り回っていた。レンガ工場の世界しか知らずに大きくなっていくのかと考えると悲しくなった。フレンズで、ものごいや物売りをする子どもたちにお金や食べ物をあげる代わりに教育やスキルを与えるべきだと聞いた。それを聞いてカンボジアに滞在している間に自分でも何か子どもたちにスキルを与えることができたらと考えていた。レンガ工場を去る前ある子どもとハイタッチをしようと手のひらを出したが、なかなかハイタッチをしてくれなかった。ハイタッチをしたことがないのかと思い、その子の手を持ってハイタッチを教えた。すると周りにいた子供たちも続々集まってハイタッチを真似するようになった。その子を含めてみんな嬉しそうな顔をしていて幸せな気持ちになり、自分が成し遂げたかったこともできて達成感を得ることが出来た。今後もレンガ工場にいる子どもたちの現状が良くなり、将来の選択肢も増えればいいなと考えた。

2. 研究テーマと今回の収穫

私は主にシングルマザーについて研究を進めている。カンボジアのシングルマザーについては、香須美様からお話を聞くことが出来た。行政のシステムは日本の方が進んでいて頼ることができる。今まで調べてきた先行研究では雇用の問題について取り上げている論文が多くあった。読み進めていく中でシングルマザーは社会からの厳しいまなざしから、何でもひとりで抱えて精神的に辛くなってしまうのではないかと考えていた。香須美様からお話を聞いて分かったことは、カンボジアとの圧倒的な違いはシングルマザーであっても孤立することがないこと

だ。カンボジアの家族の絆は日本では考えられないほど強いもので、自分が離婚してしまっても何かあったら親元に帰れば助けてくれる習慣があるのは心強いものだと考えた。そこから、日本のシングルマザーはどのくらい孤立してしまっているのか、またどのくらい家族に頼ることができていないのか疑問に感じたため、これからの卒業研究で調べていきたい。

3. まとめ

私だけプノンペンからの参加になってしまったが、それでも多くの有益なことを学ぶことが出来た。今回のフィールドワークに向けてあまり下調べをせず、最低限のことだけを頭に入れてカンボジアに行ったが、すべてのことが新鮮で新しい発見をすることが出来た。様々な施設を訪問する中で、フン・セン首相のことが挙がることがあった。香須美さんが政府批判をすると仕事がなくなってしまうと言っていたり、唯一真実を伝えていたVOD？でさえも政府によってつぶされてしまったりと、独裁ぶりはとんでもないものだと密かに感じた。カンボジアの人たちは貧困から抜け出そうと必死に動いているが、みんなフン・セン政府につぶされてしまう恐怖を抱えているのではないかと考えた。

フィールドワーク全体を通して、自分よりも大変な生活を送っている人たちを間近で見ることが出来たからこそ、日ごろ抱える悩みが贅沢な悩みだと思ってしまった。スバイリエンの小学校に行ったゼミ生から、校則の話をしたが聞いていた子どもたちから勉強できることがまず贅沢なことだから校則は守るべきだし、なぜ校則を守れないのかわからないと言われたことを聞いた。それを聞いてカンボジアの子どもたちは学校に行けることに有難みを感じて必死に勉強しているのに、私は勉強内容が少し大変で逃げてしまったことが何回かあり情けなくなってしまった。このこと以外にもカンボジアに滞在している間、日本で暮らしていて常に便利な生活があることが当たり前になってしまっていることに気が付いた。今回のフィールドワークで得た経験を忘れずに、今後の生活にも活かしていきたい。

私はみんなよりできることが3日分少なかったため、その分誰より本気でフィールドワークに取り組んだ。ワークショップの中で感じたこと・考えたことを40分間書き出す時間があったが、そこで自分の強みを再確認することが出来た。エントリーシートの私の強みを「主体性」にしている。この強みはキャリアセンターの方と一緒に自己分析を進めたときに発見していただいたものだが、私にとって主体性にあまりなじみがなく、むしろこの強みが本当に自分にあるのかと疑問に感じながら就活を進めていた。フィールドワークを進めていく中で、自分でこれやってみようと思ったことを実行に移したことが幾度かあった。健司さんのワークショップ中で書き出していったときに、自分で行っていたことを思い出して、これが主体性であることに気が付くことが出来た。このワークショップを通して自分の強みに自信が持てるようになった。

また、ワークショップを行ったことで、アウトプットすることに対する抵抗感がなくなった。ワークショップに参加する前、課題などで自分が学んだことや感想などを言語化することがあまり得意ではなかった。健司さんのワークショップを始める前に4原則「楽しむ・助け合う・決めつけない・ためらわない」を確認したことで、まずワークショップに対する抵抗感がなくなった。それから3分間のトーク・４０分間の書き出し・そのあとのディスカッションを通して、ちゃんと時間をかけてじっくり考えれば自分で話したいこともアウトプットすることが出来ることが分かった。

学生生活を送っていて、自分のことをここまで見つめなおす機会はなかなかできなかった。このワークショップで見つけることが出来た自分の強みを誇りにして、これからの生活で活かしていきたい。

20FL804 森下　晶代

1. 聞いたこと・考えたこと

私は、このフィールドワークを通して、都市部と農村部の格差が激しいということを肌で実感した。スヴァイリエンでは 2 つの小学校に訪問したが、先生たちの声を聞いて、学校の設備が十分ではない、また、教室自体が外にあり、雨の日には授業ができないため、雨でも授業を開校できるようにしてほしいという要望があった。また訪問先のプラサー小学校では、教師の人数は 5 名で、そのうち養成校を卒業して教員になった人は 3 名、契約教員が 2 名だった。このように、村の教育現場では、設備・教育の質などに問題があり、解決がされていない部分が多いことを学び、農村部の教員が増える施策を考えるべきであると思った。しかし、子どもの権利についての教育が普及していることにはとても驚いた。私たちは、小学校の頃から子どもの権利の授業があったり、子どもの権利を知る機会は少なかったように思うが、私たちが行ったスヴァイリエンの小学校では子ども権利を学ぶ時間があり、子ども達が積極的に授業に参加していたため、日本より子どもの権利の教育は普及しているのではないかと感じた。しかし、子どもの権利を知る機会は普及しているが、それを行使する場がないことや、行使の仕方を知る機会が少ないように感じた為、その部分をこれから強化していくべきだと思う。そして、子ども達の進路に目を向けると、都市部で現地の大学生と交流した際には、「私たちのように都市部に住む子どもは、お金を払えば大学に行くことができる。」と言っていたが、村に住む子どもは高校や大学へ進学する機会があまりないようだった。村に住む人々は、進学のために都市部へ出ること、そしてそこで生活すること、学費を払うことが容易ではない。農村部と都市部の格差を埋めることはとても大変なことであり、必ずお金が絡んでくる問題なのだと強く実感した。

私たちは、レンガ工場へも足を運び、工場に従事し働く人々の現状を知った。工場には、工場長の指示に従い日々過重労働をしている人々、不衛生な居住地、重いレンガを運んで労働をする子ども達、必死に泣きながら何かを私たちに訴えている方もいた。労働環境が良くないこと、それに反論できず日々もがいて働く現状を目の当たりにして、都市部に住む人々との経済格差をここでも実感し、何もできないもどかしさを覚えた。カンボジアに行き、都市部と農村部の格差が激しいことを目で見て確認することができたが、その分、解決するべき細かな課題が山積していることを知った。農村部で、女性の権利、子どもの権利を普及させるために何をするべきか話し合う評議会などを訪問し、意見を聞いた際、問題を解決しようと努力していることは理解できたが、その女性や子どもの権利を守らなければいけないと言葉にしているだけで、実際はそれを尊重できていないのではないかと思う部分が多々あった。その土地の問題はその土地を良く知っている現地の人々が協力し、良くしていくことが一番であるとは思うが、他の地域や国からも支援に入ることで、意見に偏りが出ず、より多様性を生かすことができる評議会になるのではないかと考えた。また、今回のフィールドワークでは、その取り組みをしている団体の方々、勉強を教える側の教員の方々など、片方の意見を聞く機会が多かったため、市民、教育を受ける側の子どもは権利や住む環境に対してどう思っているのかなどを聞き、話の内容と実際の状況のギャップなどをもっと深く知ることができれば、農村部と都市部の格差などを少しでも軽減できるのではないかと考えた。

2. 研究テーマと今回の収穫

私の研究テーマは、「日本に住む外国ルーツの子どもに対する教育について」である。この研究を進めようと思ったきっかけは、アルバイトで、実際に海外から日本に移住する子どもに接することが増え、その子どもたちが置かれている状況に興味を持ったからだ。調べると、日本国籍でないと教育が強制されない環境、また、日本語教育が行き届いていないことなどが起因し、日本で教育を受けることができない子どもがたくさんいる状況が明らかになった。特に、言語問題が深刻である。母国で母国語を学び途中だったにも関わらず、日本に移住することで、日本語を学び始め、結局どの言語も十分に話すことができない、また、親は母国語を話すが、学校に行くと日本語を使わなければならないため、言語習得が上手くできず、意思疎通がうまくできないという障壁があることが分かった。カンボジアには、このような問題を抱え辛い思いをしている子どもたちに会うことはできなかった。しかし、子どもが母語を完璧に習得できない環境である問題は、カンボジアでも起きている問題だと思う。児童労働をし、学校に通えないことで、母語を習得できなかったり、農村部での教員の質の低さが母語教育に影響を及ぼす可能性もある。この外国ルーツの子どもが直接的に存在していないとしても、この子どもが抱える言語問題は、カンボジアにも言えることだと感じた。教育は皆に平等に与えられるべきものであるため、これからも教員を増やせる環境、制度作りを進めていくべきではないかと考える。そして、ＳＶＡを訪れた際、ミャンマーのクーデターを逃れた子ども達が、タイに移住しているという情報を得た。タイでは難民が認められていないようだが、移民学校があり、そこで子ども達が学んでいるそうだ。しかし、いつ警察に捕まるかわからないという環境に置かれているため、安心して教育を受けられない。日本に住む外国ルーツの子どもや、タイの難民の子ども達の問題などを解決するためにも、ノンフォーマル教育をもっと普及させていき、遅れている部分を補うなど、社会的弱者に目を向けた環境をこれからも作っていくべきだと考えた。

3. まとめ

今回のフィールドワークを通して、日本とはまるっきり違った環境を目の当たりにした。私たちには、家の近くにコンビニがあり、すぐに必要なものが買える環境がある。この環境の中で生活しているとそのありがたみに気づくことは難しいが、国を出て違う世界を見ることでそれが当たり前ではないことに気づく。私たちが不自由ない生活をしている裏では、たくさん苦しみ、毎日必死に生きている人がいる。そのことを少しでも認識することで、大量生産大量消費などの無駄をなくす動きになったり、募金をする人が増えるかもしれない。この発展途上国の現状を知ることができた稀な存在であるからこそ、世の中の、他人事と考えている人に私たちがその状況を広め、より良い世界にしていく使命があると思った。そして、子ども達が不平等な環境で生きるのではなく、皆が平等に教育を受け、子どもらしい生活を送れる世の中を実現したい。

健司さんのワークショップを通して

健司さんとの２回のワークショップを通して、仲間の大切さを学んだ。ワークショップでは、その日にやったことや感じたこと、学んだことを制限なくノートに書き出し、それを発表し、皆から意見をもらい、疑問に対する解決策や答えへの道しるべを教え合った。このワークショップでは、「楽しむ」「ためらわない」「決めつけない」「助け合う」という４つルールがあった。このルールは、普段守られているようでなかなか守られていなかったりする。例えば、「楽しむ」である。普段、自分の考えを発表することは緊張することで、言葉に詰まってしまったらどうしようなどの不安から、楽しめないことがある。また、「決めつけない」ということは、意見を聞く側にいるとき、他人の意見を否定しないように気を付けているが、自分の意見を言うときにはあまりこの点を重視したことがなかった。しかし、今回のワークショップでは、誰も否定しないというルールだったため、安心感があり、「これは否定されそうだから言うのはやめよう」などのためらう気持ちがなかった。このように、自分の意見を言ったら否定されるという固定概念を変えてくれるワークショップであった。そして、このワークショップを実際に仲間と時間をかけてすることで、自分の気づくことができなかった部分に気づいた友達の意見を聞くことができた。カンボジアでは、見る景色や環境、言語、人柄、生活スタイルなどすべてが日本と違っていた。そのため、毎日思ったこと、学んだことが違い、吸収しなければいけないことも多かった。また、言語の違いからレクチャーを聞き逃してしまい、聞き取れていない部分があった。それらのことを友達と共有することで、自分の認識の誤りや、新しい事実を知ることにも繋がった。自分と同じような意見を持つ子がいたとしてもそれは完全に同じ意見ではなく、ところどころ違った意見を持っていることもある。私たちのゼミナールには全員で９名いるため、それぞれが持っている意見を共有したり話し合ったりすることで、自分の思いつかなかった部分や新しい発見をすることができる。何事も、自分ひとりでやることには限界があるため、これからの人生でも、人の力を借りつつ、自分の知らない世界を切り開いていくべきだと思った。また、このように毎日新しいことを吸収し続けている時には、しっかり細かくメモを取ること、そして、それを復習する時間がとても大切であると感じた。新しいものを見たときには、新鮮な感情がたくさん生まれる。しかし、それを書き出す機会はあまりない。今回、思ったことや感じたこと以外にも自分の感情を書き出したことで、自分の感情の変化を感じることができた。初めは異国の地に来ることができた嬉しさを感じていたが、村やレンガ工場を訪れることで「かわいそう」「本当にこの子たちは幸せなのか」などの疑問や負の感情が現れた。しかし、その後、現地の子ども達と遊ぶことで、自分が思っていた「幸せ」の固定概念が変化したり、負の感情ばかりでなく、前向きな感情も生まれるようになった。このように、見たものばかりではなく、自分がどう思ったのかなどの感情もメモしておくことは、後に見返したときにその時の状況を鮮明に思い出すことができる重要な手掛かりになると思った。このワークショップを通して、卒論などで迷った時には心強い仲間がいるのだということを実感した。

20FL820　山崎　姫乃

1. 聞いたこと・学んだこと

今回のフィールドワークでは観光では訪れられないような様々な施設に訪問する機会があった。小学校ではカンボジアの小学校での実際の授業風景が見られたり、校庭では子ども達が普段どのように遊んでいるかを見ることができたりした。その他にも、ピアエデュケーター、大学生などからのお話、数々の団体の方や現地で暮らした経験のある人からのお話を聴くことで、カンボジアの過去のお話から現状、問題点まで、幅広い分野のことについて聞き、深く学びを得ることができた。今回の学びの中では自分の研究テーマに関する質問とその回答からの学びに加えて、他にも印書的であった学びがあった。

まず、自分の研究テーマに関しての学びは、子どもの権利の参画は出来ていると言えるところもあれば、金銭的な問題から後回しにされており、悪循環が止まっていないことが分かった。地方と都市部であらゆるもののかけ方が違うそうで、富が多いという見せかけを行っているそうだ。また、中川香須美さんのお話からは、政府の役人と当事者の子どもたちが政策対話をする機会をカンボジアの NGO が行っており、そこでは子ども達の意見が通ることも多いことを知った。しかし、小中学校では子どもの参画についてほとんど行われておらず、国からの働き方は少ないそうだ。子どもの参画に力を入れている団体としては、SVA が挙げられる。SVA では幼児教育にも力を入れており、子ども達が楽しく遊びや経験を通して遊ぶ幼稚園づくりを目指している。図書館の建設や学校建設などは子どもの居場所を増やす取り組みとして挙げられる。また、コロナ禍でカンボジアではどのような授業が行なわれていたか聞いたところ、オンラインで先生が授業を行う映像が流れるのみで、学生が質問する機会がない時もあったと聞いた。やはりコロナ禍での授業というのは学生が充分に教育を受けることができなかったり、意見や質問を言う機会がなかったりしたことが分かった。

自分の研究テーマ以外で印象的だったことは、フレンズでの Tuk Tuk ツアーでのお話と CENTRAL でのお話の後、レンガ工場に訪問した時の出来事である。Tuk Tuk ツアーではカンボジアに来た観光客が気をつけるべきことや、環境問題についてのお話を聞いた。お話の中では、カンボジアのことをあまり分かっていない旅行者が子どもが困っている時に直接関わらず、まずは、そういった NGO などに助けを求めることが大切と知った。また、困っている子どもがいてもものを与えるのではなく、何か困っていることはないか質問することが大切だと教えていただいた。レンガ工事への訪問は、児童労働と貧困を目の当たりにして衝撃的なことばかりであった。CENTRAL で、レンガ工場のすぐそばに家族で暮らしていると聞いていたが、思っていたよりも近くに、失礼ではあるが、今にでも何か起きたら崩れてしまうのではないかと思うような家々があり、子ども達も裸足で工場内を走り回ったり、レンガの上を歩いていたりした。子ども達は学校にも行けず、砂が舞っている工場内で遊んでいるのがなんとも残酷だと思ったと同時に、この子たちの将来もずっと過酷な労働下で過ごすことになるのだろうかと考えたら悲しくなった。ただ、子ども達はずっと笑顔で楽しそうに遊んでいるため、この子たちにとってそれが幸せなのであれば、無理に勉強した方が良いと言うのも酷なのかと思い、本当の幸せとはなんだろうと考えさせられた。

2. 研究テーマと今回の収穫

私が関心を抱いているテーマは「子どもの参画」である。子どもにも大人と同様に自由に意見を表明したり団体を作ったりできる“参加する権利”がある。しかしながら、子どもが参画できる体制が充分にできていない国や地域が世界には多く存在する。日本も子どもの参画活動が活発な地域や学校はあるが、日本全体で見れば海外に比べて不十分だと思われる。

このことから、日本で子どもの参画を広げ、子どもが参画しやすい環境をするためにはどうすべきかを研究したいと考えた。現在は、ロジャー・ハートの「子どもの参画のはしご」の考え方を参考に、海外の子どもの参画事例や日本で行われている子どもの参画活動の事例などを比較し研究を進めている。

リサーチの結果、カンボジアでは昔よりは子どもが声を上げやすい環境になっていることが分かった。子どもの権利の授業があることや、社会科の教科書に子どもの権利が取り上げられていることなどから、日本よりも子どもに権利があることを子どもたち自身が認識できているのではないかと考えた。しかし、子どもの権利と子どもの参画については都市部と地方でも認識や権利尊重の度合いは偏りがあり、特に地方では、曖昧な回答も見られたことから、まだ、大人も子どもも良く理解できておらず参画が進んでいるとは言い切れない状況と考えられた。ただ、日本では子どもが授業の中で手段として参画する機会はあるが、直接的に授業や教科書を通じて子どもの権利を学ぶ機会はない。その面においては先程述べた通り、子どもの権利と参画の認知度はカンボジアの子どもの方が理解していると考えらえる。

このことから、カンボジアの例を参考に、日本でも今後、子どもの権利が教科書に挙げられ、授業でも取り扱われれば子どもの権利と子どもの参画がより身近な存在になるのではないかと考えた。

3. まとめ

フィールドワークを通して、自分の研究テーマについての収穫があっただけではなく現地に行ってみないと分からないカンボジアの現状を目の当たりにすることができた。日本にいて、ただインターネットから情報収集するだけでは理解しづらいこともお聞きすることができて良かった。カンボジアに行く前は不安なことも多かったが、カンボジアで出会った方々が優しい方ばかりで、子どもたちも元気に私たちのところへ話しかけにきてくれたためとても嬉しかった。その反面、貧困や児童労働、教育的な面ではまだ改善すべきところが浮き彫りになっていたため、子ども達が今後質の良い教育と子どもの権利が充分に尊重された環境で過ごせるようになってほしいと心から思った。

また、今回は観光地などにはあまり行く機会がなかったものの、スバイリエン、プノンペン、シェムリアップという３地域への訪問を通して都市部と田舎の違いが分かった他、カンボジア料理や村での日本と違った様式のトイレ、更に昆虫食を食べるなど文化面での新しい発見もあった。その上で、カンボジアの良さや日本の良さ、恵まれていると感じるところも見つけることができた。

改めて、今回の経験は一生の思い出に残ることばかりであった。毎日が新しいことづくしで、1 週間という間で本当に濃い時間が過ごせたと感じた。今後もこのフィールドワークでの経験を活かして生活し、研究も進めて行きたい。

健司さんのワークショップを通して学んだことや成長したこと

健司さんのワークショップは 3 回にわたって実施していただいた。まず、一日目のバスの車内で行ったが、この時は 4 つのルール（楽しむ、ためらわない、決めつけない、助け合う）を守りながら、疑問を挙げていった。何度か疑問に思ったことをそれぞれ挙げていったが、自分は深く考え込む性格のため最初はまず、質問を思い浮かべるところから悩みはじめてしまっていた。しかし、健司さんが疑問に思うことはなんでも良いと言ってくださったので、その後は目に入った外の風景や、直感で思ったことなど素早く疑問が出てきた。5W1H を付け加えることでさらに疑問といのは浮かびやすくなると実感した。本来、疑問というのは簡単に出てきていいものだが、大人になるにつれて、そのマインドが薄れてきていることを学んだ。深く考えることが必要な時もあるが、時にそれは障壁になるのだと考えさせられた。

2 日目の夜には、ペアになって一人ひとり自分がカンボジアで思ったことを伝えた。私は少し言葉に詰まる場面が出てきたが、どうにか話そうという努力は忘れないようにした。相手の話を聞くときも頷きを忘れないことを大切にしていたが、相手の人の傾聴力が素晴らしかったため自分ももっと頑張らなければいけないと感じた。また、健司さんが段階的に質問を問いかけることや具体的な質問を問いかけることが大事とおっしゃっていたが、そうすることで、より効果的な回答が返ってくる可能性があることを学んだ。ついつい質問は一つしたら終わりになってしまうことが多かったが、そこから更に深掘りすることの大切さを学んだ。質問も相手とのコミュニケーションであるため、質問し終わったらそこで終了ではなく、更に話を広げることが重要だと考えられた。また、みんなが思ったことに対しても更に疑問をあげることで更にその話に対して深掘りできて考えが深まったと感じた。

3 回目は 7 日目の朝に行われた。2 回目と同様、最初にペアで 3 分間話したが、2 回目の時よりも話したいことがすぐに出てきた。言葉に詰まることなく、逆に 3 分では足りないというほど話したいことで溢れていた。更に傾聴力も意識して相槌だけでなく相手が話しやすい表情作りも意識した。相手の話からも共感できる内容が多くその度に自分の考えも浮かんできた。その後、約 40 分間、自分の考えや思ったことの書き出しを行ったが、こちらも 2 回目よりも書きたいことが多く浮かんできた。40 分間手が止まることなく集中して書いていたが、体幹 20 分くらいしか書いていないと思っていたため、40 分でも自分はこんなに書きたいことが浮かんできたのかという成長を感じた。研究テーマに関することから、カンボジアで感じたことまで幅広いことについて書き出していた。また、紙に書いている途中でも、書いている内容から更に自分の考えが浮かんできて、フィールドワークを通じて想像力も上がったと実感できた。

健司さんのワークショップを通して、自分がどんなことを考えているか、自分にはどんな強みがあるのか見つけることができた。4 つのルールを守りながら話すことで、より自分の話したい

ことを話すことができ、みんなの本音を聞けることができてよかったと感じた。また、相手の意見を尊重することの大切さも充分理解できた。更に、今回思ったことを紙に書くことで自分の考えが目に見えて効果的だと実感した、今後、何か悩んだ時や考えがうまくまとまらない時にこのようなことを実践していきたいと思う。

謝辞

今回のフィールドワークでは以下の方々に大変お世話になりました。
私たちのために貴重なお時間を割いていただいたこと、お忙しい中丁寧に質問に答えていただいたりと、皆さまのご配慮、ご協力に心から御礼申し上げます。

トゥルオンプラサー小学校の校長先生をはじめとする先生方および子どもたち
CCWC の皆さま
ポーマオン小学校の校長先生をはじめとする先生方および子どもたち
元ピアエデュケーターのニタさん
元ピアエデュケーターのソンハーさん
シーライツコミュニティセンターの子どもたち
ピアエデュケーターのヘン・ソフォンさん
フレンズ・インターナショナルの Torie McElwain さん
セントラルの Khun Tharo さんをはじめとする職員の皆さま、レンガ工場で出会った皆さま
CAMASEAN の Srun Srorn さんとみなさま
パニャサストラ大学の学生の皆さま
シャンティ国際ボランティア会（SVA）の加瀬貴さん
中川香須美さん
中村健司さん
ガイドのポーキーさん
現地通訳のラタナさん

甲斐田万智子ゼミ生一同